

歴史記述の理論

服部之總

はしがき

はじめの考えでは、三篇にわけて、第一篇で歴史哲学の現代的——そして日本の形態を論じ、第二篇で特に歴史理論を頭においていわゆる史学史を扱い、第三篇を唯物論史学の方法論にあて、夫々百枚前後でスケッチ風に概論できると考えていた。第二篇は晴山見鳥氏に分担して貰うこととし、共同著作の実をあげたいと、打合わせも数度行つたうえ、さて私自身第三篇にとりかかつてみると、これは簡単に百枚前後でスケッチ風というわけには、ゆきそうもないことが判つた。

というのも、史学方法論の領域では、唯物論的再構築の仕事が従来ほとんど出来ていない。史的唯物論の理論についてみるに、ブハーリン批判以来めざましく進行したその理論的發展は、ほとんどもっぱら世界観としての契機に於いてであつた。このことは最近における史的唯物論の理論的展開への参与者が殆んど哲学の専門家を中心にしているという事実からも、見てとることができるだろう。これに対して歴史家の立場からする史的唯物論の理論的發展の仕事は、私が見た限りではなお乏しく、殆んど着手されたばかりである。市民的史学の場合には、修史家は史論を他人まかせに——哲学者に一任したのだが、同じ傾向が唯物論史学の場合にも、今日のところなお支配しているのではあるまいか。ということが考えられてくると、いつてみればいろはから出直おして、この問題にぶつかつてゆかねばならない。

これは大へんな仕事で、かつ辛抱しんぼうのいる仕事である。私ごとき未熟な人間に、短時日で出来ることではない。にもかかわらずともかく何事か試みなければならなかつた。願わくば一片の試論として

読んでいただきたい。

最初の篇別を引こめて、第三篇だった筈のものを第一篇に据え、とりあえずクロオチエの篇別を借用して体裁をととのえたのはそうした事情に基づいている。第二篇は、晴山氏の執筆にかかり、これまた豫定された叙述領域の全部を盡しえたわけではない。我々としては、後日よりまとまったものにしあげる機会を必ずしもちたいたいと考えている。

一九三五・一二・一〇

服部之総

〔編註〕 本書では、第二編は省略し、又、第一篇のタイトル「歴史記述の理論」を原著のタイトル「歴史論」のかわりに使用した。

目次

はしがき

第一章 最近に於ける唯物論史学再構成のころみ

一 唯物史観と歴史記述

二 ブイコフスキー

三 グーコフスキー

四 相川氏

五 歴史記述の唯物論的再構成への途

第二章 歴史記述の対象と方法

一 歴史記述の対象と主題

二 歴史学の対象と経済学の対象

三 三 経済史の方法と経済学の方法

第三章 史学分類及諸問題

一 経済史

二 「上部構造」の歴史

三 普遍史または一般史

四 特殊歴史

3 目次

五 「歴史研究の方法学」

第一章 最近に於ける唯物論史学再構成のこころみ

一 唯物史観と歴史記述

歴史家の仕事は古来歴史記述にあった。だが科学としての歴史記述が可能になったのは史的唯物論の確立以来のことである。エンゲルスが「ブリュメール十八日」第三版序文の中で、「歴史の運動の大法則を最初に発見したものはマルクスその人であった。すなわちこの法則によれば、一切の歴史上の闘争は、よしそれが政治上、宗教上、哲学上、ないしはその他の觀念上の領域に起ろうとも、実際においては、それは社会階級の闘争の多かれ少なかれ明白な表現にすぎないものであり、そしてこれらの階級の存在と従つてまたその衝突とは、さらにその經濟状態の發達程度により、その生産の性質及び方法とこれによつて決定せられる交換の方法とによつて制約せられていうものである。この法則は歴史にとつて、かのエネルギー轉換の法則が自然科学に対する意義と同一の意義をもっている。そしてこの法則こそここでも彼に、フランス第二共和政の歴史を理解する鍵を与えたのであった。彼はいま、この歴史に應用して、彼の法則の試験を行った。そして三十三年後の今日にいたつても、我々はこの試験が燦然たる結果を示していると云わなければならぬ」と記しているのは、この間の事情を端的に表明したのである。史的唯物論に基く最初の詳細な歴史記述は、マルクスの「フランスに於ける階級闘争」(一八五〇)である。それは「彼の唯物論的見解によつて、時代史の一

片を、与えられた経済状態から説明せんとする、マルクスの最初、試みであった。マニフェストにおいては、この理論は、ごく大ざっぱに全近代史の上に適用され、「新ライン新聞」紙上のマルクスと私との諸論文においては、この理論はつねに同時代の政治上の出来事を説明するために利用せられていた。然るに本書において試みられていることは、数年間に亘つての全ヨーロッパにとつて危機的にして、また典型的な発展の、内的な因果関係を指摘すること、すなわち著者の考えでは、政治上の出来事を究局においては、経済的な原因の作用に還元することであつた。

(一) 「フランスに於ける階級闘争」へのエンゲルス緒言。

史的唯物論に基くことで始めて「科学」たりえた歴史記述のことを、それ以前の思辯的観念的な歴史記述に対して、マルクスはみずから「現実的な歴史記述」と呼んだ。もし人々が好んで政治家としての、哲学者としての、或いは経済学者としてのマルクスを語り、しかも歴史家としてのマルクスを忘れていたならば、非常な忘却といわねばならぬ。いかにもマルクス及びエンゲルスの著作目録のなかで完備した歴史記述と称すべきものが占める量は多いとはいえない。それも「フランスに於ける階級闘争」、「ブリュメール十八日」「新ドイツ建設に際しての強力及び経済」(未完稿)等いわゆる現代史にぞくするものが大部分で、十六世紀ドイツに取材した「ドイツ農民闘争」にしても、それを「全ドイツ史の枢軸」たらしめるべく完全なものに書き換える仕事は、「豫備的研究は大体完了」(ゾルゲへの手紙)したが遂に成しとげられないでしまった。それにもかかわらずこれら著作は、いわゆる「現実的な歴史記述」のための見事な規範を与えており、マルクス・エンゲルスの諸理論と相ま

て歴史記述の学問的性格をあきらかにするためのよきモデルとなっているものである。

(一) 「経済学批判序説」第四節

史観が修史（歴史記述）のための方法となり、修史が史観のための実証面となるといふ関係は、^{およ}凡そ史観そのものの歴史と共にふるいものであるが、史的唯物論の確立によって、はじめてこの関係は現実的なものとなった。神が一切の歴史の原因であり、神と悪魔の闘争が全人類史の内容であると見る聖アウグスチヌスの史観は、人類史を聖書の系譜に従ってアダムからキリスト死後にいたる六期に分ける彼の修史を産み出すのであるが、この場合史観と修史との破綻なき関係は現実の歴史に対するおそるべき暴行に於いて成立つにすぎない。その種々なる様式に従ってマルクスが「いわゆる客観的歴史記述法。主観的歴史記述法（道德的その他の）」。哲学的歴史記述法」と分類したところのふるき修史法は、多かれ少なかれ本質に於いて聖アウグスチヌスの暴行の上に成り立つ点で「觀念論的歴史記述」に部類されたのである。ついでながらここにいう「いわゆる客観的」修史法に關して、ナポレオン三世のクーデターを描いた場合のブルードンの方法が挙げられている。「ブルードンのほうはクーデターをこれに先立つ歴史的發展の結果として説明しようと試みてはいる。しかるに、クーデターの歴史的構成は、いつのまにか、クーデターの英雄の歴史的辯護^{べんご}に変じている。かように彼は、吾々のいわゆる客観的、修史家の誤謬に陥入っている。これに反して私は、いかにフランスに於ける階級闘争が、凡庸にして滑稽なる一人物をして英雄の役割を演ずることを得しむるような情勢と関係をつくりだしたかを指摘する」^(三)。

(一) 「経済学批判序説」第四節

(二) 「ブリュメール十八日」へのマルクス序文。

このいわゆる客観的修史法は、史的唯物論の体制に対する其後の文化反動の線上に沿うて、修史を完全に凡ゆる史観乃至理論史学から絶縁せしめることを以て修史の理論たらしめるところの「記述学派」史学にまで到達した。この後者についてはいづれあとで触れることがある。例えばブーリンの「史的唯物論」の中で与えられている歴史理論には、記述学派の原則が密輸入されており混交されていることを容易に人は見てとることができよう。彼はいう。「これらの分野（社会諸科学）の各々において、科学はさらに二個の部門に分類される。一の部門は何時何処で何があったかを研究する——これは歴史学である。例えば社会は、法律の分類において、法律および国家は如何にして発生したか、その諸形態は如何にして変化していったかを精密に探究して、詳しく叙述することができ。これは法律の歴史である。しかし、我々はまた法律とは何ぞや、それは如何なる条件の下に発生し、如何なる条件の下に消滅するか？ その諸形態は何に依存している？ といったような一般的問題を研究して、それを解くことができる。これは法律の理論である。こういう学問を我々は理論科学と名づける。

社会諸科学の中には、社会生活の個々の分野を研究するのではなくて、社会の全生活をその一切の複雑さのままに観察するところの二個の重要な科学がある。換言すれば、これらの科学はある一列の現象を扱ひわけけるのではなくて、全体としての社会の全生活を研究し、一切の社会現象を観察するのである。こういう科学は一方においては歴史であり、他方においては社会学である。

(一) 「史的唯物論」緒論第五節

すでに今日では全面的に批判済みな筈の旧ブハーリンをここで引出すことは、意味のないもののようにも見える。事実また、ひとしく唯物史観を論講した永田広志氏の近著を見れば、すでに唯物史観と歴史に関する下のごとき簡潔にして正確な規定が与えられているのである。

「歴史（科学としての）が唯物史観と異なる点は、それが後者の如く社会発展の一般的合法則性を対象とせず、この一般的合法則性が各々の特殊な社会経済的構成において採る具体的様態・特殊形態を問題とするということにある。そこで史的唯物論は現実的歴史における無数の偶然性の錯綜の中に必然的なもの、本質的なもの、一般的合法則性を見出し、歴史はかかる必然的なもの、本質的なもの、一般的傾向が現実の社会生活における無数の偶然性の複合の中に如何に具体的にあらわれているかを現像の因果的究明に基いて描写するものだ、と云うことが出来る。かくて歴史は社会的現実を悉く描写することを目的とするのでなく、社会発展における一般的なもの必然的なものに関する限りにおいての種々の社会現象の経過を対象とする科学である。従って史的唯物論は歴史の方法であり、歴史は史的唯物論にとって概括の唯一の現実的地盤である」。

(二) 永田広志「唯物史観講話」第五章

両者の間にはもはや何らの共通点もない。その代りその間には、ブハーリン批判以来の史的唯物論の理論に関する巨大たる進歩が背景として横わっている。だが、それにもかかわらず、然らば史学

じたいの領域において、はたしてこれに照応する理論的展開が営まれているかという段になると、疑問なきをえないのである。このことは、殊に最近わがくに於ける史学的研究の異常な勃興の事実と相まって、まず吟味してかかる必要があるものと思われる。

二　ブイコフスキー

プハーリン理論の全面的批判が開始されて以後、史学じたいを扱った著書、ないし論文で我が国に紹介されているもののうち、ブイコフスキーの「歴史研究の方法学」は唯一のまとまったものであるが、本書はその書題のごとく「歴史の方法論」から区別されたところの「歴史研究の技術または方法学」にもつぱら捧げられているものである。両者の関係について彼はいう。

「史的唯物論の理論は歴史学の方法論である。史的唯物論の理論によつて樹立される研究方法は、歴史的過程自体の特性によつて制約されている。しかし歴史家は、当該歴史的事件の記念物によつて反映された歴史的過程を取扱う。これらの記念物は、研究の特殊な技術的方法の總体を制約するところの、その特別の特殊性を持つている。史的唯物論はこの方法を取扱うことはできぬ、何故なら歴史的記念物の特殊性は、もつぱら歴史の方法論の対象を構成するところの、歴史的過程の合則性に対して直接の關係をもっていないからである。歴史研究の方法は、厳密な意味で科学的知識の独立部門ではないような科学的原理なのである。それが特に研究の技術的方法を取扱うかぎりに於いて、我々はそれを、歴史学の方法論と区別して、歴史研究の技術的方法論と呼ぶことができる。この意味

においてそれは補助的な歴史的原則と呼ばれ且つ広義に理解される史的唯物論の理論の一部を構成することができる。正にこの原則の問題こそ以下の全叙述の対象となるであろう^(二)。

(一) 西雅雄訳「史学概論」昭和九年、二九頁、原書名「歴史研究の方法学」レニングラード一九三一年。

この論述に再吟味を必要とする点はないであろうか？

ブイコフスキーのいわゆる「歴史研究の技術的方法学」は第一部「歴史研究の技術」に於いて「史料の概念」「史料の基本的集団」「研究に際して史料を吸収する仕方について」以下いわゆる史料学が扱われており、第二部「歴史的批判」の場所では史料批判学が論じられているのであるが、一見して知られるようにベルンハイムの「史的方法教本^(三)」以来いわゆる史料学派（記述学派）的史学方法論の準則となっているものの線上にある。この謂は単に外形上の相似に基くものでないことはいずれあきらかにするが、ベルンハイムがその方法学の篇別を史料学・史料批判・解釈・表現の四大部に分つたのは決して偶然ではなく、史料学派＝記述学派としての本質に基いているものであったのである。

(一) Bernheim, Jethbuch der historichen Methode. 1889. これをベルンハイム自ら簡約した「史学入門」Einführung die Geschichtswissenschaft の一九二〇年ベルリン改訂版の邦訳が岩波史学叢書第一篇として出版されひろく行われている。坂口昂、小野鐵二共訳「歴史とは何ぞや」大正十一年。尚最新改訂版に基く改訳版が今年岩波文庫から出ている。この「史学入門」のロシア訳のことが、「注意に値する」ものとしてブイコフスキー「序言」中に指摘されているのは偶然ではない。

ベルンハイムが一方で歴史（歴史記述）を定義して、^(一)にもかく、にも「一、の科学と名づける。何とな

れば、歴史は或る一定の事実領域をば因果關係をつけて認識すべきであるからだ」と述べているからといって何ら驚くにはあたらない。蓋し彼の史学の「科学的性質」たるや、「唯物史觀派の抱く考え」からは最も遠ざかったところの「価値に關係さした心的・物的因果連絡に於いて」「人間の發展の諸事實を究明し且つ表現する」にあつたから。ベルンハイムに較べたら、「歴史は何ら科学ではない」と敢て書いたマイヤーのほうがよっぽど正直であり率直である。

「歴史は何らの体系的な科学ではない。歴史の職能は、いつか、一度現実世界に起つた事變の経過を、究明し表現叙述することである。随つて、個々の歴史家がそれぞれにどんな特殊の問題を立て得るにしても、歴史はいかなる場合でも、個体の限りなき多種多様ということから、決して離れることができない」。

「實際、多年の歴史研究に於いて、私自身、未だ嘗て歴史法則を発見したことが無く、又誰かほかの人の研究に於いても歴史法則は見当らない」。

率直と円曲「婉曲」との差異はあるが、兩者とも同一の骨の髄までの史料学派・記述学派たる点には何の変わりもない。その証拠には、ともかくにも歴史の「科学的性質」を認めたはずのベルンハイムは、ひとたびその本領とする「歴史方法論」の領域に入るや、すでに「歴史の職能はいつか一度現実世界に起つた事變の経過を究明し表現叙述することである」という率直なマイヤーの提言を、すでに最も率直な仕方で方法化しているのである！

(一) 前出「歴史とは何ぞや」第一章第三節

(二) 「歴史の理論及方法」岩波「史学叢書」第五篇。三頁及六六頁。本書 Edward Mayer, Zur Theorie und

Methodik der Geschichte. (Kleine Schriften, 1910) の邦訳である。

一、「史料学」(Quellenkunde 又は Heuristik) なるものは史料蒐集の方法であり、直接的観察や思出、報告(伝承)、遺物等もろもろの史料源泉の分類と性格づけがそこで行われる。「史料保存場所は図書館・記録文庫・博物館である」という、この篇の終りにちかい一句を記憶せよ。

二、「史料批判」(Quellenkritik) とはかくて蒐められた諸資料の「事項の事実性を決定」する方法である。何よりも、図書館・記録文庫・博物館等についてかき蒐められた雑多な諸史料を、「証拠力ありとして許さるるや否や？」等々と自問しつつ経験的に「選り分け」、「更に利用しうるよう整頓する」——これがいわゆる「外的批判」、それが済むと今度はおもむろに「証拠の内的価値・証拠力を確定し、かつ諸証拠を相互によって対決し、相互に価値を較量する」いわゆる「内的批判」。そして最後に「主題・時および場所による諸事項の配列」——これが「批判」の「最後の職能である」。

三、「解釈」(Auffassung 又は Interpretation) とは、「諸の史料証拠をば、それが立っている広い狭いの関聯の意味で、解説すること」で、その場合何より注意すべきは餘事にあらず、「モルガンやエンゲルスの著作及びベーベルの婦人と社会主義」が陥っているような「個々の観察を見当ちがいに普遍化する誤謬」これである！ 「解釈」は「客観的把握」(Objektive Auffassung) たらねばならぬ。客観的把握とは「関聯の把握」にほかならぬ云々。

(マルクスの分類における「客観的歴史記述」につき想起せよ)。

四、「表現」(Darstellung) とは——要するにどうでもいいことである。

何故なら、すでに見た(とき史料学——史料——批判——解釈の操作と順序を経ることによって、

はじめに図書館・記録文庫及び博物館からむやみやたらに蒐められた筈の諸資料は、いつのまにか「客観的」に、「関聯の把握」としての自己表現にまで到達していたからである。だから、「表現は、ただ史学の作業手段としてのみ考察される、すなわち、研究の結果に、その目的相応な表現を与えるための手段として見られる」。強つて云えば、明鏡止水が要諦である。「主題そのものから、内的な合目的性を以て自発する塩梅あんばいになつて出来てこなければならぬ」。表現における党派的態度は、「表現」論の大部分を費してせつに戒飭かいちよく（あやまちをしないよ）さるるところである。思うにクロオチエが諷して以て「外交的」と呼んだランケの骨法こそ、かくのごとき要請における「表現」の悟道であらう。

ベルンハイムの「方法学」とはまさにかくのごときものであつたからこそ、全記述学派Ⅱ史料学派のための方法学たりえたのである。これに対してはクロオチエ以上にほがらかな言葉できめつける術はあるまい。

「あの文献学者たちの単純な確信、すなわち彼等の図書館・記録庫・博物館の中に歴史を収蔵している——あたかも、「千一夜物語」に出てくる精霊が压榨された煙となつて一個の壺の中にとじこめられてあるように——とする単純な確信……は、単なる事物を以て、伝説物語及び文書（空虚な物語と枯死した文書）を以て築かるべき一の歴史の觀念を発生させている。これはすなわち文献学的歴史と呼ぶべきものの場合である。私は敢て事実と云わずして觀念という。そのわけは、如何なる努力といかなる勤勉とを以てするも外的事物の上に歴史を築くことはもとより不可能である。新たに磨きをかけ、色々に区分けし、結果を改め、配列を変えたところで、記録は依然として記録でしか

ない。云いかえれば空虚な叙述でしかない」。

また、「事実の選択」という重要な問題にふれている場所で

「すべて、博識家も文献言語学者も、選択する。(けれども、クロオチエによれば、凡そ「選択」のための論理的基準なるものは存しない)。なぜならここ(選択)にあつては我々は実践的探求の中を動いて、科学的探求の中を動いてないから。まことに、この論理的規準の缺如こそは迷論のものである。そしてこの迷論はあの暗愚の蒐集業者の上に暴威をふるつて、そうして彼等はすべては有益たりうるという正しい主張のもとにすべてを保存しようとする不正を敢てする。そして古着や珍物やよろず切端しを山とあつめ、これを眺めまた嫉妬的な愛撫をもつてみはりまもることに身をやつす」。

「選択」の原理を且つ歴史構築の全原理を「生の哲学」に見出すことで、歴史と哲学の幾久しき乖離を「新らしき」結合にもたらしたと信じた愛すべきわがベネデト・クロオチエ。さしあたり彼をこそ選択して、一切の記述学派の性格が——口上いかにもっともらしく「法則」を云い、「科学」を云い、その探究を誓約しようとするは「古着や珍物や、よろず切端しを山とあつめる」モノマニアである、唱和しておこう。そしてこのモノマニアの歴史的、社会的役割につき「表現」すべく・かの史料——批判——解釈のやかましい手続きを人は必要とするであろうか。

(一) 羽仁五郎訳「歴史叙述の理論及び歴史」二七—八頁

(二) 同訳書一四七頁

さて、ブイコフスキー「歴史研究の方法学」に立還えるためには、すくなくとも、ベルンハイムの方法学に関するさきに述べただけの批判が、あらかじめ必要であつた。もとより歴史家の仕事は運

命的に「史料」なるものから離れられない限り、史料を処理する技術に関する旧史学の遺産に対しては充分の関心をもってこれを継承する必要がある。だがそのことはただ劣らず充分の関心を以てそれを批判することによってのみなしとげられる。すでに見たごとくベルンハイムの史料処理学は構成したいから細部にいたるまで記述学派的歴史方法論によって浸透されており、むしろそれは記述学派的歴史方法論の実体上の裸身であった。その中では、(主観的には)、歴史家一般が直面するところのあらゆる史料の処理法に就て總括的に論じられている筈であるのに、マルクス主義史家ならばただちに当面しなければならぬような重要「史料」部門——たとえば労働手段の特殊な又は一般的な体系としての「技術」について彼は一語でも費していただろうか? 「すでに亡び去った動物種属の身体組織を認識するにはその遺骨の構造を知ることが重要であるが、それと同様に労働要具の遺物を知ることは、既往における経済的社会構成を判断する上に重要な手懸りとなる」という「資本論」の言葉はあまりにも有名であるが、ところでブイコフスキーが与えている「史料」分類の第三部門「事物的記念物」——「考古学的発掘によって得られる種々の物件、及び地表上に見出される過去のあらゆる他の事物的遺物」の場所にも、ベルンハイムと大同小異の「古い都市の廃墟、墳墓、家屋、門、墓石、衣服、什器等」が指示されているにすぎないのは、単に物足りぬでは済まされまい。両者の史料分類学じたいについて云えば、本質上まったく同一のものであった。例えば法律的記念物をベルンハイムは「遺物」の部門に編入するが「穩当でない」。そこでブイコフスキーはこれを「文書的伝承」の集団に配置しなすくらゐのものである。

(二) 同書三六頁

ベルンハイム

ブイコフスキー

一、直接的観察及び思出

一、口碑伝承

二、報告(伝承)

A、口碑
B 文学による伝承

二、文書伝承
三、事物的記念物及び絵画による伝承

C 絵画による伝承

四、残存物

三、遺物

A、狭義の残留
B、記念物

もとよりこの種の整理そのことは、史料に対する者にとって決して不必要な事柄ではない。だがベルンハイムにとつての「史料」はすでにクロオチエが^や揄^ゆしたごとくそれじたいの中に「歴史」がひそむところの「精霊の壺」を意味していた。そして彼の史料分類は、この神秘の壺の中から歴史が原稿用紙の上に自己展開してゆくための第一階梯であり、「批判」は第二階梯であり、「解釈」及び「表現」は最終階梯であつた。かかる場合に、人あつて若^もしかの「解釈」及び「表現」の場所に「歴史学の方法論」としての史的唯物論を置きかえることで、容易にベルンハイム以来の「史料学」と「史料批判」学を救済し継承しようと考えたとすれば、事態は全く容易ではない。ブイコフスキーの「史学概論」は、我々の見るところでは、本質上この種の折衷主義の線上を^{ほうこう}彷徨していると思われる。この折衷を合理化すべくブイコフスキーはあらゆる苦心を払っている。彼は一方で、たとえば「すべてこれらの方法——いわゆる「記念物の最終的総合的批判」の五つの方法を指す——は、本来、史

的唯物論の理論がその根抵たるところの同一の方法の変種である」と云う場合、史料批判学がその隅々まで「歴史の方法論」としての史的唯物論によって貫かれておるべきことを正しく要請している。いわゆる「歴史研究の技術的方法学」が、「広義に理解される史的唯物論の理論の一部を構成することができる」という場合も同様である。だが、それにも拘わらず他方で——しかもこの同じ言葉が聞かれておる同一のパラグラフで、「史的唯物論はこの方法を取扱うことはできぬ、なぜなら歴史的記念物の特殊性は、もっぱら歴史の方法論（史的唯物論）の対象を構成するところの、歴史的過程の合則性に対して直接の關係をもっていないからである。歴史研究の方法は、厳密な意味で科学的知識の独立部門ではないような科学的原理なのである」（前出）という場合、彼の要請に対する彼の無力を吐露したものとわづらざるを得なからう。

(一) 前掲訳書、一八四頁。

このことはまた、彼にあつては——或いは、彼に云わせれば他の人々にあつては——史的唯物論の理論が何等か固定的・形式的なものであるかの如く觀念ことされていることと照応する。

「歴史研究の急速な遂行の一般的な且つ全く必然的な前提たるものは、歴史学の方法論および歴史研究の技術的方法論（方法）の把握である。上述のことに照応して、問題は、特に歴史学の方法論に関して、形式的な知識にあるのではないことを記憶することが必要だ。史的唯物論の理論の領域における形式的知識では不足であり、そしてこの知識を物神崇拜すべきではない。例えば、ブルジョア歴史家は決して史的唯物論の方法を把握しえないであろう。同じことは、社会生活から遊離した「ソヴェート」

歴史家についてもいわるべきである。かくして、歴史学の方法論の把握なく且つその把握への当然の前提なしに史的唯物論の技術を把握することは、何ものをも与えない。……即ち、歴史研究のすべての方法の完全な把握は史料に関する実際的な仕事の過程においてのみ到来する^(二)」。

(一) 前掲訳書六五頁。

ここでは実に沢山^{たくさん}のもやもやが吐露されている。原書に直接に就くための便宜がないためかも知れぬが、決してそれだけではあるまい。あるいは彼は、社会生活から遊離しているツヴェート史家は、ブルジョア史家同様に、史的唯物論の理論を形式的に理解し物神崇拜していると云おうとしたのかもしれない——併^{しか}し、史的唯物論の理論は歴史家の史料を処理する実際的な仕事の過程においてのみ、歴史記述のための技術学にまで発展しうるものであり、彼はこの仕事を果しつつあるのであると仮にそうだとしても、彼がこの事で現実に示しているところの「技術的方法学」は、彼の要請を裏切つてあまりにも史的唯物論の理論から独立しており、それだけ多く記述学派的歴史方法論に接近している、という事実はこれを如何^{いかに}ともすることができない。もとよりブイコフスキーの「技術学」は、ベルンハイムのそれと全然同一のものではありえない。ベルンハイム的方法学に対する批判の方向に於いて、彼が多少とも積極性を示しており、マルクス主義的課題に近づいている諸点については後で触れることがある。

さて、ブイコフスキー自身の成果がいかようにもあれ、史的唯物論の理論の史学技術学への深化^{II}具体化という彼の主題の意義については、何人もこれを認めるにちがいない。しからば、ブイコフス

キーによって非難されている一部ソヴェート史家たちにあつては、はたしてかかる主題の意義が理解されておらず、その解決のための努力が試みられていないのであるうか。そうではない。同じくわがくに紹介されているソヴェート史家の歴史理論のうちから、つぎに私はグーコフスキーのもの(二)を検討してみる。彼は同じ主題を、ブイコフスキーとは殆んど異つた仕方(ほと)で、解決せんと試みている。

(二) グーコフスキー「歴史科学とは何ぞや」。「歴史科学」昭和七年創刊号訳載。原著はグーコフスキー・ト
ラバテンペルグ共著「前資本主義社会史」(モスクワ、一九三二年)序論。

三 グーコフスキー

「社会学は何らかの仕方(ほと)で歴史に対立するものだ、という風に考えてはならない。社会学なくしては何らの科学も——歴史も存し得ない。何故なら一切の歴史家の任務は、まさに、所与の具体的歴史状態の事(ほと)中一般的社会的法則を発見するといふ点にあるのだから。歴史家は、単に、材料を蒐集し、記述するものであるが、社会学者は、これらの材料を、一般化して、社会発展に於ける合則性を確認するものであると考えるならば、大なる誤認(ほと)である」。という場合のグーコフスキーは、一見「理論」と「歴史」・史的唯物論と歴史記述に関する旧ブハーリン的定式の批判に出発するもののごとくである。かくてグーコフスキーは科学としての歴史記述の再建に立向う。あらゆる歴史記述はその科学性を明瞭に規定されるべく、彼の「歴史科学」の体系に包摂される。

「歴史諸科学、あるいはより適確に云えば単一の歴史科学のありとあらゆる諸分枝が限りなく多数に存在している。これらのうち若干のものは、一定の諸問題(階級闘争史・宗教史・文学史・労働組

合運動史・農業技術史その他等々)の範囲に、またある一定の時代(パリ・コンミュン時代、十九世紀、十月革命以後その他)に、最後に一定の地理的(あるいは政治的)境界(ドイツ・アジア・モスクワ地方・ロシア・ソヴェート同盟その他)に限られている。

だからたとえば、歴史科学の若干の分枝のつぎのような命名が生ずるのである。すなわち「十九世紀における西欧の階級闘争の歴史」、「フランスにおける戦後の労働運動史」、「十八世紀のロシアにおける農奴経済史」その他等々。

これら一切の実例においては、歴史は、個々の、全く一定の(具体的な)現象及び事件について語る。または約言すれば、地理学および年代学の範囲に限定しつつ、或る主題の研究に従っている^(三)。(力点原文)

我々はさきに、マルクス・エンゲルスによって残された歴史記述として「フランスに於ける階級闘争」「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」「ドイツ農民戦争」等を挙げたが、グーコフスキーの分類に従うと、これらのものは「地理学および年代学の範囲に限定しつつ或る主題の研究に従う」ところの「諸分枝」である。しからばこれらを「諸分枝」として統合するところの「正確に言えば単一の歴史科学」とはいかなるものか。

「単一の歴史科学」の概念は、グーコフスキーの場合、「単一の社会科学」と同義語ではあり得ない。後者は彼にあってはむしろ「社会学」と呼ばれて、「そのみが歴史を科学たらしめるところの方法論の地位に置かれ、合則性・生産力と生産関係・上部構造・社会経済構成等のこれを要するに史的唯物論の基本諸命題が、かくのごとき「方法論」の要約として与えられている。そこで彼がいうと

ころの「歴史科学」の構成要素をさらに求めて、つぎのごとき解答を彼から得ることができらう。すなわち、前掲引用文に引続いて、

「だが問題はこれとは運ったものであり得る。歴史はより広汎な諸任務をも自己の前に提出する。歴史は一定の限られた時代のある一国、または数国のグループの歴史的進路のみならず、人類発展の種々の段階における全人類の歴史的進路をも記さねばならぬ。かような場合には、歴史家は歴史の種々の部門によって供給される材料を利用する。彼は種々の国の歴史から取られた多数の実例を蒐集し、注意して研究する。彼は全系列の個々の場合に反覆される一般的特徴を注意するように努める。そしてたとえば資本主義発生の時代における階級闘争の具体的な歴史の実例の若干数を観察してしまつた後に、これら一切の実例の中に或る一般的なものが存在する、という結論を作ることができるのである。この時代にはいたるところに農民の^{伏字}、が増大すること、……労働者階級が形成されつつあること等を見受けることができる。歴史はこれら一切の一般的特徴を注意し、資本主義発生の時代においては常に階級闘争の一定の型が生ずるといふ結論に達するのである。それ故、イギリス或はフランスにおける資本主義発生の階級闘争の具体的な歴史だけが問題となり得るのでなく、資本主義発生の階級闘争の一般的形態が問題となり得るのである。かくのごとく広汎に提起された諸課題は、もはや具体的歴史によってではなく「社会学」(社会学(ソナオロギー)——文字通りには社会に関する科学のこと)によって解決され得るものである」。(力点原文)

(一) 前掲「歴史科学」創刊号三―四頁。

(二) 同上 二―三頁

この一聯の論述の中から原著者により力点を附されている場所を引出してみよう。曰く「単一の歴史科学——その無限の諸分枝としての「具体的な」歴史記述——これとは異ってより広汎な任務を課題とするところの・「型」を・「一般的形態」を課題とするところの歴史部門。

ここにおいて彼のいわゆる「単一の歴史科学」なるものの概念は略々^{ほぼ}あきらかであろう。これら引用文が一切をなすところの彼の序論は「歴史科学の一般的特徴づけ」と題されており、この序論をもつところの彼の著書は「前資本主義社会史」と書題されているのであるが、この「前資本主義社会史」こそ、かの「型」又は「一般的形態」を課題とするところの歴史部門であり、「諸分枝」としての歴史記述と共に、「単一なる歴史科学」を構成するところの実体であった。すなわち

「社会の経済的發展法則を研究する特殊の科学がある。それは経済等である。だが経済学は形成された階級社会のみを研究するものである。しかし階級的構造は社会諸関係の永遠の形態ではない。それ以前に他の諸形態が存在していた。もし我々がこれらの前階級的諸関係と資本主義發展の経過とを闡明^{せんめい}しないならば、この資本家的社会の不可避的揚棄へと導く要因を理解することができない。前資本主義的構成の歴史が、この任務をなしとげるこの歴史は人類がいかにして資本主義へ到達したか、資本主義以前にはいかなる諸関係が存在していたか、そして何故に色々の社会諸関係が交互に交替したかを物語る^(二)」。

(一) 前掲訳文——二頁。

「経済学は形成された階級社会のみを研究する」という彼の規定はあきらかに間違っているが、そ

それはそれとして、彼の「前資本主義社会史」の構成が資本主義社会に到達するまでの人類社会の一般史の叙述にあつたということは、右引用部分からしても、また彼の著書の篇別そのものからも理解することができる。さて、彼の「一般的」歴史科学がかくの如きものであつたとすれば、あたかもそれはブハーリンが「社会の全生活をその一切の複雑さのままに観察する二個の重要な科学……一方において歴史・他方において社会学」という場合の「歴史」であり、これに対して彼が「諸分枝における」歴史科学のうちに数えあげているところの宗教史・文学史等々は、同じくブハーリンが「各科学分野における二個の部門……法律の歴史……法律の理論」というのに該当しよう。グーコフスキーのせつかくの「単一の歴史科学」の構成が、こんなことに終るのであれば、ブハーリン的図式主義に対する彼の批判も、相川氏が指適しているように、言葉のみといわれても仕方があるまい。

(一) 相川春喜「歴史科学の方法論」二〇頁、相川氏は「社会学は歴史科学の方法論である」というグーコフスキーの命題に対する批判からこの結論に達している。曰く「教授(グーコフスキー)のいわゆる「社会学は歴史科学の方法論である」という命題は、歴史科学が一の社会科学ではないかの如くに取扱ひ、結局は(彼が批判したような)社会科学と歴史科学の(ブルジョア的には「社会学」と「史学」との、又は「経済原論」と「経済史」との)対立的分科主義に同意しているものに外ならぬ」。

だが、いま一步すすめて、この一見ブハーリン的史学の構成と同一な彼の単一の「歴史科学」の構成の中に、歴史記述をしてブハーリンの意味における「純粹記述」科学たらしめないで、法則探究に従事するところの独自の「歴史科学」ならしめるといふ、彼自身の意図のあるところを探し求めてみよう。一般に史的唯物論の理論を歴史記述の方法論にまで再構成するという、当年のソヴェート史

家たちの課題を解かんとする一つの試図が、彼の「歴史科学」論として提示されていたのにちがいないのであると見て。

思うにその試図は、「全系列の個々の場合に反覆される一般的特徴」・「一般的形態」・「一定の型」を「種々の発展段階における全人類の歴史的進路」の上で究明するという新部門の「歴史科学」が個々の歴史記述に対してもつところの關係の中に置かれている。換言すれば、彼がもつばらその仕事の中に「歴史科学」の展開を試みたところの「前資本主義的構成の歴史」は、個々の歴史記述に対してそれじたい方法論としての地位に置かれる。個々の歴史記述は、「前資本主義的構成の歴史」等の「あらゆる諸分枝」たる關係に置かれることによって、「単に材料を蒐集し記述する」前科学的存在から解放され科学としての「歴史科学」に包摂される。「前資本主義の歴史」等は「社会学」(グーコフスキーの語法によれば史的唯物論の事を指している)であると同時に歴史であり、その逆もまた然り。蓋し「かくのごとく広汎に提起された諸課題は、もはや具体的歴史によってではなく「社会学」によって解決されうる」のだから、そこで「前資本主義的構成の歴史」は「社会学」と個々の歴史記述との中間にあり、「社会学」としての史的唯物論を歴史記述の方法にまで具体化するところの「歴史科学」の枢軸部門となる。仮りに表示すれば下の如し。

一、「社会学」として史的唯物論

二、「資本主義的構成の歴史」

三、個々の歴史記述

かくて「歴史科学」者グーコフスキーの問題解決は唯物史觀の理論を唯物史觀的一般史の形で再展

開することにかかっている。^(二)だが、それによつては「歴史家」ブイコフスキーが自己の課題として個々の歴史記述のための直接的具体的方法——いわゆる歴史研究の技術学にまでの史的唯物論の具体化という使命は結局依然としてとり残されたままに終る。そこで後者は前者のことを、史的唯物論への形式的知識を以て満足し史学方法論を具体的に把握しようとしなない「社会生活から遊離せる」一部史家たちと呼んだのであろう。蓋し^{けだ}この場合の「社会生活」とは「資料に関する実際的な仕事の過程」にもつぱら従事するていの「歴史家」としての生活のことであるにちがいないけれども。

(一) 「前資本主義社会史」の篇別は次のごときものである。邦訳が無いから掲出しておく。

序(ペー・クーシユネル)

序説(アー・グーコフスキー)

歴史科学の一般的特徴づけ

資料

一、前階級社会(原始時代)(オー・トラバテンベルグ)

(1) 動物から人間へ

(2) 原人

(3) 生産経済への移行

(4) 現代における原始社会の残存物

(5) 原始的心理について

二、前階級社会(氏族制度の時代)(アー・グーコフスキー)

(6) 生産経済の強化

(7) 氏族組織

(8) 氏族制度の残存物

- 三、階級社会の起源とアジア的および奴隷制的生産様式の問題（アー・グーコフスキー）
 - （9）社会の階級分化の前提と経路
 - （10）アジア的生產様式と古代の大河川文化
 - （11）奴隷制的生産様式と地中海の略史
- 四、封建制（アー・グーコフスキー）
 - （12）ヨーロッパ封建制の起源
 - （13）封建社会の經濟制度
 - （14）封建社会の政治制度とイデオロギ
- 五、封建時代における都市（アー・グーコフスキー）
 - （15）封建都市における手工業と商業の発達
 - （16）手工業者と商人の組織
- 六、封建的関係の解体および資本主義的関係の生誕の時代（オー・トラハテンベルグ）
 - （17）時代の一般的特徴づけ
 - （18）商業の発達
 - （19）貨幣と信用
 - （20）大商業の組織
- 七、工業（オー・トラハテンベルグ）
 - （21）ツンフト的手工業の解体
 - （22）資本主義的家内生産
 - （23）マニユファクチュアと鋳業
- 八、農業制度と農民運動（オー・トラハテンベルグ）
 - （24）農業制度の一般的特徴づけ

- (25) イギリスにおける農業制度と農民の運動
 - (26) フランスにおける農業制度と農民の運動
 - (27) ドイツにおける農業制度と農民の運動
 - (28) ロシアにおける農業制度と農民の状態
- 九、封建制の解体と資本主義制度の生誕の時代における政治制度（アー・グーコフスキー）
- (29) 民族国家の形成
 - (30) 絶対主義
 - (31) 商業国家
- 一〇、初期ブルジョア革命（アー・グーコフスキー）
- (32) 十六世紀のオランダにおける革命
 - (33) 十七世紀のイギリス大革命
- 一一、ブルジョア・イデオロギーの初期形態（アー・グーコフスキー）
- (34) 都市文化と生活様式
- 一二、産業資本の時代への移行（アー・グーコフスキー）
- (35) いわゆる資本の原始的蓄積の一過程
 - (36) 産業革命
- 一三、結論（アー・グーコフスキー）
- (37) 本教科書の意義
 - (38) 非資本主義的發展経路の問題

四 相川氏

相川春喜氏の近著「歴史科学の方法論」は、唯物史観と歴史記述の問題に関するグーコフスキー的設問に一つの解決を与えんとしている点で、また就中、羽仁五郎氏の先年の論著以後の時期に於いて、我国でこの方面の理論的課題を取扱った殆ど唯一のものとして、注目すべき文献である。以下もつぱら本書「首篇・歴史科学と史観」を対象とする。

相川氏はあらかじめ「歴史科学」なる概念を、夫々対象を限定しつつ三種に區別する。

「最も広汎な意義における歴史科学」、「より狭義における歴史科学」及び「限義における」すなわち「限定されたる意義における歴史科学」。この各々の概念に対する相川氏自身の定義の引用を割愛する代りに、最後のものを除いた二種の概念に就いては、マルクス・エンゲルス自身の用語法に従って人々が知る筈である所以を指示しておこう。すなわち氏のいわゆる最広義における歴史科学とは、「ドイッチェ・イデオロギー」リヤザノフ版に云うところの「唯一の科学、歴史の科学を知るのみ」。歴史は二つの方面から見られて自然の歴史と人間の歴史とに区分されることが出来る云々に該当する場合であろう。このときは「自然の歴史、いわゆる自然科学」も、「人間の歴史」もまた「この歴史の諸側面にすぎないイデオロギー」も、「唯一の科学・歴史の科学」の領域であった。

つぎに氏の「より狭義における」歴史科学とは、右にいう「人間の歴史」を特に対象とする場合であり、氏によれば「経済学批判序説」に、「各々の歴史的社会的科学の場合と同じく経済的範疇の道程に於ても云々」という場合の「歴史的社会的科学」の概念であるとされている。この場合「より狭義に於ける歴史科学」はひろく用いられている「社会諸科学」と同義語であろう。

最後に「限義の」歴史科学——すでにマルクス・エンゲルスの古典的語法には見出されないこの耳

新らしい概念を以て、相川氏は一方では、従前一切の歴史記述およびその学としてのいわゆる史学の概念に対応させると共に、他方では、従前の史学が科学としてのマルキシズムの中に揚棄されつつ存続する場合の科学部門を表明せんとするもののようなのだ。殊ことにこの後者の意図において、「歴史科学」に関するグーコフスキーの設問を直接相川氏は継承していると見られる。

まず「限義の」歴史科学なる概念のマルクスの規定に到達すべく下の如きグーコフスキー批判から氏は出発する。すなわち、グーコフスキーが「『広義の経済学』の対象を『階級社会のみ』に局限し、歴史科学のために『前階級社会』という独自の『専有領域』を『占取』する繩張的な誤謬」を冒しているのは「明かに反マルクスのものである。これは『歴史科学』の名において『経済学』のマルクスの対象規定を、その方法的基礎と共に歪曲するもので、例えば、所有という経済的範疇はんちゆうの史的性質を見ただけで明かなことだ。結局は、前階級社会（即ち原始共產主義社会）を経済的構造でないかの如ごとくいう素朴な方法論上の誤謬でしかない」。そして氏は下の如き一応の解答に到達する。

『限義の』歴史科学とは『広義の』経済学けいぎがくに外ならないか？『然しかり！』と著者は先ず、答えなければならぬ。^(三)「正しくその方法一般のみならず、その対象も同一であるが故に、両者は先ず、同一者として規定されねばならぬ」。^(三)

(一) 相川春喜「歴史科学の方法論」一七頁

(二) 同書 一九頁

(三) 同書 二〇頁

グーコフスキーの課題が実は史的唯物論の理論を唯物史観的一般史の形で再展開することにかかっ

ていたとすれば（参照前節末註）、相川氏のグーコフスキー的「歴史科学」に対する批判は、この場合、当たっていない。グーコフスキーの一般的歴史科学は、理論的にも著作「前資本主義社会史」の上でも「前階級社会」という独自の「事有領域」を「占取」してはいないからである。それにも拘わらず相川氏の到達した帰結はグーコフスキーの一般的歴史科学の要請にほぼ合致せんとするものである。蓋し相川氏の「歴史科学」は「広義の経済学」と、方法も対象も同一であり両者は「先ず」同一者として規定されねばならぬのであるから。

もつばら資本主義的生産様式とそれに対応する生産及び交換関係を研究するところの「狭義の」経済学と、あらゆる、即ち、「種々なる人間諸社会がその裡に生産し、交換しこれに依じて生産物を分配し来つた諸條件及び諸形態の学」としての「広義の」経済学との関係は、「反デューリング論」第二篇第一節で与えられているところで、それに基く相川氏の展開（一一一―一七頁）はいまここで触れない。相川氏自身によって与えられている広義の経済学の定義づけ——「前資本主義的社会構造の歴史的段階に関する、夫々の特殊な諸條件・諸形態の分析的研究の具体的指針のみでなく正に具体的分析し叙述そのもの」という規定の吟味につけて、後で触れる場合があろう。いずれにせよ、グーコフスキーの「歴史科学」における一般的方法的部門は、「前資本主義社会史」の篇別が語っているように人类社会の始源段階から初期資本主義の発生段階にいたるもろもろの社会経済的構造の必然的継起の普遍史であった。相川氏の「広義の経済学」にあつてもまた、種々なるグーコフスキー批判にも拘わらず、まさに同似のものが要請されている。そして相川氏の「歴史科学」とは、かくのごとき「広義の」経済学と「先ず」同一者として規定されねばならない。

(一) 相川氏前掲書一二頁。

「だがその次に、吾々は本来同一であるところの、この「広義の」経済学が、何故に「限義の」歴史科学と、その名称を異にするかを、従つてまた、本質的にその科学の特質区別を、果さなければならぬ」。

ここで相川氏は、いわゆる「限義の」歴史科学なる概念が、従前一切の歴史記述及びその学としての所云「史学」の概念に対応するものであることを明らかにする。しかも、かくのごとき対応そのものの中に、広義の経済学と限義の歴史科学との差別性の秘密があつたのだと説明される。換言すれば、「歴史科学」(従つて従前一切の史学)なるものが何らか「経済学」から対象及び方法に於いて異つたものと見えるのは、マルクス以前における学問的制約性の結果であり、科学としてのマルキシズムの体制にあつては、かくの如き差異性は揚棄さるべきである、という氏の主張が認められる。ややくわしく氏に就いて知ろう。

「マルクス主義全学説体系は一の「宗派」^{セクト}でも「学派」^{シュレ}でもなく、「……当時の科学の全成果に対する完全な通曉を基礎としてその証明を示した」ものであり、「科学発展の大道に生れた」ものである。マルクス、経済学についていえば、それはフィジオクラシーから正統派までの近代経済学の「自己批判者」であり、「直接的相続者」であり、且つ批判的揚棄者である。

他方、これを歴史科学に即していうならば、ヴィコからヘーゲルまでの「歴史哲学」の就中革命的辯証法の継承的揚棄者たる唯物論的史観の創建と、Klassenkampf (階級闘争) に関するブルジョア的及びプロレタリア的 Umwälzung (大変革) の主観的 (階級的) 並に客観的 (「生活的」) 諸条件に関する、唯物

論的歴史叙述の「正統的」建設とを具有していたのである。

「資本論」の全内容は、経済学的著作でもあり、哲学的著作でもあるが、同時に極めて精細且つ厳密な分析に立つ歴史的叙述をもつところの歴史科学的著作でもある。それは資本の原始蓄積期、マニファクチュア時代、産業革命、産業資本確立期の資本主義的發展過程の記載をもつのみではなく、封建制とその崩壊過程の歴史的叙述をもつばかりでなく、奴隸制・原始共同体社会の若干の叙述をも有っており、当時の著名な「史家」の研究成果をも「批判的に」反映せしめられている。

ブルジョア的経済学及び歴史科学の、直接的且つ内在的「自己批判者」こそが、全社会科学史の公道を往くところのプロレタリア的経済学であり、歴史科学であり、且つかかるものとして独自の、ヨリ高き段階にある科学であるという立場こそ、この経済学と歴史科学との夫々の相対的に、独立した史的特質と任務を明かにするものであろう。

経済学的叙述と歴史科学的叙述とが、その篇別構成において、その個々の叙述様式において、従つてまた研究上の「技術的な」操作においても、著しく対蹠的にみえるのは、かかる学史的・地盤のため、制約されているからである。経済学の篇成及び記述が勝れて範疇的であり理論的であるのに対し、歴史科学の篇別及び記述が著しく過程的であり材料的であるのは、近代科学一般の社会的現実的必要性が制約しているとはいへ、明かに歴史科学の跛行を示すものに外ならない^(三)。

「かくて経済学は範疇であるが故に具体的である。その法則的意義はマルクスにより定立せられた。歴史科学はこの点で著しく立ちおくれ、その篇成及び記述において極めて、「自然成長的」であり、科学的には逆の、単なる年代的順序に従つた歴史叙述をもつて満足せしめられた。それは単に過

程的であり、単に材料的記述に過ぎなかつたではないか。^(三)

『狭義の経済学』を確立し、よつて以て『広義の経済学』の向後の研究上の具体的指針と若干の古典的叙述を与えた偉大なる創設者たちが、謙虚な言葉で『今後に打達てらるべきもの』と遺言した(遺言者の一人はしかも例えば『家族・私有財産・国家の起源』の著者である)『広義の経済学』の確立・発展・具体化こそは、同時に歴史科学創設の一の重要な方面である。^(四)(力点中「・」は相川氏「」は引用者)

(一) 相川氏前掲書 二〇頁

(二) 同書 二一―二二頁

(三) 同書 二三頁

(四) 同書 二五頁

ここに於いて我々は、科学としての歴史記述は「歴史家Ⅱマルクス主義者」にあつては「広義の経済学」たるべきものだ——という前人未踏の提言に接したのであるうか? もしも前記引用文中の最後の言葉たる「歴史科学創設の一の重要な方面」という反省が与えられておらず、また著者みずからによりこの重要な方面の前進のために捧げられたところの全巻のアルバイトが「歴史科学の方法論」と特に書題されていなかったとしたら、すくなくとも相川氏自身の「歴史論」としてならば、殆んど我々は右の如き提言に接していたといわねばなるまい。しかし氏にあつては、歴史家本来の任務たるもろもろの歴史記述そのことが忘失されており、私をはじめに挙げたような例えば「ドイツ農民戦

争」や「ブリュメール十八日」等が「歴史家＝マルクス主義者」に対して保有するところの古典的・標準的意義の重要さが認められていないように思われる。

この点でわが相川氏は、ブイコフスキーが批評した場合のブイコフスキー的傾向以上のものであった。だがそのことは相川氏の著書が全体としてブイコフスキー等の「前資本主義社会史」と趣旨の上で同じ線上にあるものたることを妨げない。より重要な問題は相川氏により提示されている「歴史科学」の対象規定及び叙述様式に關しては、あとでふれることがある。

五 歴史記述の唯物論的再構成への途

以上みてきた諸著作はいずれも史的唯物論と歴史記述の問題を史学ないしは史学批判の立場からとらえつつ、夫々の方向それぞれにおいて歴史記述のための一般的方法の建設を所期しつつあるもの——相川氏の言葉を籍りると「歴史科学のマルクス主義的再建築」を所期しつつあるものといふことができる。ブイコフスキーの消極面は彼がいきなり問題の立て方をブルジョア記述学派的設問に添うて行つたところにあつた。「歴史研究の技術」の問題は「史料」の処理の仕方に始まるのでなく、「対象」を処理する仕方に始まるべきであろう。史料なき対象を歴史家はいかんともすることができぬではないか——という逆襲はこの場合無意味以上のものである。なぜなら、対象なき史料を取扱ふという点にこそ、ブルジョア記述学的方法論の本質があつたのだから。一例をとれば「史料学」なるものは歴史家のためのあらゆる史料源泉を級別し特質づけることにあるのだが、原始共産時代あるいは

古代社会を対象とする場合の史料学と例えば明治維新を扱う場合の史料学とは根本的に異なるものであるはずだ。グーコフスキー的ないしは相川氏の「歴史科学」——初期資本主義段階にいたるまでの前資本主義的普遍史を歴史家が対象とする場合でも、史料学の構成が対象によって規定される点には変りはない。「前資本主義社会史」でグーコフスキーが与えている史料学は粗雑ながらこの規定性を意識している。しかしいきなりベルンハイムに倣った^{なら}ブイコフスキーの史料学にあつては既に史料は完全に対象から捨象されることによって、それじたいが唯一の対象にまで外化させられているのである。現実としての特定発展段階上の（乃至は^{ないし}全列の必然的發展段階における）歴史に対する関係から遊離せしめられた場合の史料一般の技術学なるものは、一片の無意味でしかない。ベルンハイムは「日本版」を以て世界に^{フオノグラフィ}デビューした最新改訂版の中で写真術と写音術を新たに「史料」として公認したが、かくてトーキーが新たに属する史料第一類と、ローレライがぞくする第二類と、墓石がぞくする第三類とを以て彼が科学を構築する風景は、たいくつさに於いて何一つ変りばえないのである。

かくて、史学再建の課題を特に「歴史研究の技術学」の問題として捕えるとしても、史料の処理の仕方のまえに、対象の処理の仕方の問題が解決されなければならない。史観がこれを解決する。ベルンハイム流の「精霊の壺」的「技術学」の構成すら、実は対象を処理する仕方としての彼の史観によって規定されていたのである——すなわち、具体物としての史実を本質的には処理することが出来ない、という彼の史観に。

だからブイコフスキーが「史的唯物論はこの方法——彼のいわゆる歴史研究の技術的方法——を

取扱うことはできぬ」という場合、この言葉の具体的意味に於いてはベルンハイムの喝采を得るであろうが、この言葉の論理的内容すなわち史観と研究方法とを機械的に分離する意味の上では、彼はベルンハイムの側からさえ厳密には非難されなければならない。反対にまたブイコフスキーが「技術的方法学は広義に解された史的唯物論の理論の一部を構成することができる」という場合、彼は彼が所屬する「歴史家マルクス主義者」としての課題を表明したにとどまってい、しかも現実はこの課題を貫徹していないという非難を、ついに甘受せざるを得ないであろう。これをあきらかにするたぬ彼にもいちど立還えるという意味よりもむしろいま一步すすめて、いわゆる「技術的方法」の展開がいかに必然的に史観の展開を前提とし、それによって貫徹されなければならないか、という事実をまざまざと見るために、彼の著書の第一部「歴史研究の技術」の諸章のうち、一見彼がベルンハイムの史科学の構成から脱けだしていると思われるような後半部諸節をパラフレーズしつつ一瞥しよう。

歴史的文献の研究（第六節）

若し歴史家が現存する歴史文献を残らず研究せねばならぬとすれば、思いもよらぬことであろう。基本的文献、それも特に最新のもののみが研究に値する。また、全歴史過程をくまなく史料によって研究するということも、云うべくして行われ難い理想にすぎない、むしろ歴史史家は、一般的研究のほかには狭い専門を持つべきだ。そして史料的研究（あのやかましいペルンハイム的な！ 服部）もこの狭い専門限界内でやればよい。

この専門的研究以外の歴史的文献の研究のためには、歴史家は丈夫な紙の小型カードを準備

して、著者の題字と姓・正確な書名・出版年次以下云々を記入する等々

狭い専門の限界内における文献の専門的研究（第七節）

一、撰ばれた主題のための歴史的文献の目録の作製——無條件的にすべての最新の文献を網羅しなければならぬ。目録作製の場合問題の重要性は、題目の性質により、また史的唯物論の要求に照応して決定される。

二、将来研究すべき資料の豫備的一覧表

三、資料の批判的文献の一覧表——二と三は、一をつくる途上に於いて不断に完成される。

これら目録の作製が終了するや、即刻文献そのものの研究が開始さるべきだ。最新の文献からより古い文献へとという順序を銘記。

材料蒐集の技術（第八節）

どの著作が、そして著作中のどの部分が、どの程度に重要かを決定することは、勿論研究者自身に依存し、また主題に、そして主題が関接する歴史過程の特性に、最後に史的唯物論の理論の基本的要求に直接依存する。

さて材料蒐集の技術には二つの様式——カード法とノートブック法がある。両様式の夫々の便不便についての詳細な注意。（次手ながら、日本の我々としてならば、半ピラ原稿用紙という第三の様式において、前記両様式の便不便を完全に止揚できるという注意を与えたでもあろう）。

研究計画と蒐集された資料の整理（第九節）

研究の方向決定的計画の作製。資料通読の後、執筆の直前、これを作製すべし。カード式の場合の作製の仕方とノート式の場合のその異同。問題の性質、それ自体とその順序とは……また史的唯物論により云々。

資料の吸収（第十一節）

史料の範囲内での完全な把握と史料の範囲の最大限の切捨。これ資料的吸収に際しての辯証法的矛盾の真理である。

いかなる問題が、基本的であり、いかなるそれが、第三次的であるかの決定、そのものは云々。

録述について（第十二節の後半）

史料は、できうる限り自己の言葉で、即ち自己の文体の形で記述して、文字通りの引用は、特に不可欠な場合にのみ、例外的に行うべきである。しかし材料の叙述の規則というものは、示すことができない。

ブイコフスキーが問題の後半部で歴史の研究及び叙述の一般的方法として与えているものはほぼ如上のものであった。いかにもそれは、歴史学の学生にとりた、めになる諸々の忠言から成っている。

けれどもそれは、唯物論的歴史家がそれなしには済まされないような、対象を占有するための唯一の仕方たるべき「方法論」であつたらうか。かかるものは、わずかに一片のリフレインの形で、下の如く夫々の場合で繰返えされているにすぎない。曰く「いかなる問題が基本的であり、いかなる問題が第二次的であるかの決定そのものは、以下によって嚮導きやうどう（先に立つて導かれる）さるるところの研究者の責任に処することを想起しておこう。

- (一) 彼によって蒐集された材料の性質。
- (二) 研究題目の性質。
- (三) 研究題目に關係する部分の歴史過程の特殊性。
- (四) 史的唯物論の理論の命題」。

彼はこのリフレインを殆んどあらゆる節ごとに——例えば上記第七節では「歴史的文献目録」作製の場合で、第八節ではカード作製に際しての問題の重要さの撰択の仕方として、又第九節では研究計畫書作製の場合の指針として等々——繰返えすのであるが、もっと粗雑な形で云う場合はあつても、これ以上の詳細については何一つ述べないのである。だが、何人にもすぐわかるように、まさにこの点を夫々の場合に具体的に指示することこそ、歴史研究及び記述に於ける「歴史家マルクス主義者」と他のものとを区別する方法上の特質が存在する。歴史研究にあつて各々の史料をとり蒐め、カードを或はノートを作製し、整理し、篇別を作製する等々の手續は、凡そ歴史家たる限り精なり粗なりに何人といえども経験せずには済まされない。問題は此等それぞれの形式的手續に生命あらしむるところの対象を処理する仕方としての理論の武器にかかつているのだ。ブイコフスキーは

之を殆んど發展させていない(第二部「歴史的批判」の最後の一部をのぞいては)。例えば右に上げたりフレイニンにしたところで、(三)の「研究題目に關係する部分の歴史過程の特殊性」なるものは他のものと共に、明らかに(四)「史的唯物論の諸命題」から別箇のものではありえないだろうに。

(二) 彼の著書の第二節「歴史的批判」の大部分は、やはりベルンハイムの史料批判学の単なる雨又風に於ける再生にすぎない。ただ、彼により再構成された四列の史料批判形式にとって最後のものにあたる「記念物の最終批判的綜合的批判」なるもので始めて唯物史觀の方法が史料批判学に適用されているのを見る。ブイコフスキー自身つきのごとく要約している。「記念物の最終的綜合的批判のつぎの五つの方法を確認することができる。(一)方法論的考察の方法。(二)歴史的類推法。(三)対照法。(四)補助的歴史部門の資料の吸収の方法。(五)残存物法。すべてこれらの方法は、本来、史的唯物論の理論がその根抵たること、同一の方法の変種だ」(一八四頁)。

だがこの最後の形式と、それに先行するベルンハイムのな三形式との、与えられている如き形態に於ける結合がはたして充分に「方法的」であるか否かは、さきに第一部の構成で見たごとく、考慮の餘地が沢山あるだろう。

史的唯物論の理論は人類發展の法則に関する最も包括的な歸結であるから、全ての社会科学にとつて「研究の導き」の糸となり、歴史家にとつては、彼が対象を処理するための最も一般的な仕方がそこに見出される。歴史家が如何なる主題、如何なる時代を扱うにせよ、単なる記述を以て満足せず必然性合法則性にしたがう記述たらしめんがためには、何よりも先ず此の包括的命題に基づくのである。エンゲルスがマルクスの歴史記述を性格づけて「歴史科学を變革する処の此の発見」即ち方法としての史的唯物論に基づいて「従来の歴史記述に於ては全く何等の役割を演じてなかつたか、または

ただ侮蔑的役割をしか演じていない経済的事実が……決定的歴史的勢力と見る歴史記述」(「ケルン共産党事件への暴露序文」と云い、或は「彼の唯物論的見解によって時代史の一片を与えられた経済情態から説明するマルクスの最初の試み」(「フランスに於ける階級闘争へ」の序言)と述べているのは、歴史研究の方法等に於ける第一過程であり、ブイコフスキー的課題における出発点たるべきものであった。

そうだとすれば歴史科学再建の途上ブイコフスキー的試みの対極的なものとして提示されていた処のグーコフスキー及び相川氏の試図も亦当然この発程ママの線上に再発見される事が明らかであろう。社会経済的構成の中に社会的意識を決定するための社会的存在を認める(これは特に世界観的な云いいかあらわしであるが)、あるいは、「時代史の一片を与えられたる経済情態から説明する」と云う事は如何なる発展段階上の歴史の対象にも通ずるものであると共に、各々の発展段階がそれぞれに固有なる発展法則を持つと云う事と同じ史観のより詳細な展開として、従ってまた歴史記述の方法に於けるより詳細な諸規定として、与えられているからである。かくてグーコフスキー及び相川氏の試図に於いてみられるいわゆる一般的歴史(普遍史)への課題と、ブイコフスキー乃至ベルンハイムが事実上もつぱらそこに満足きよくぞく(かがまる)しているところの特殊歴史のための技術的方法論への課題とは、史的对象を処理する場合の唯物史観史学にあつては二つのものではなく一つのものとして統一される。「歴史科学のマルクス主義的再建築」の課題は、特に普遍史の問題でもなく、また特に特殊歴史の「技術学」の問題でもありえない。歴史家が対象としての歴史的具体物を処理するための方法如何いかん——という設問の線上に、史的唯物論の全遺産を再展開せよ、しからばそこに、従前一切の歴史

理論家を当惑させた方法上の諸問題が、自ら解決の途を得るにちがいない。

第二章 歴史記述の対象と方法

一 歴史記述の対象と主題

対象の無規定性ということ——これば換言すれば、歴史記述はすべてのものを対象とするということとなる——がすべての記述学派のいつわらざる告白であったことは、すでに述べたところからあきらかであろう。この告白の上でブハーリンはいかなる記述学派史家よりも卒直であったといえる。たとえばベルンハイムは彼の史学に「科学」の外見を附与すべく史学の対象を「共同体をなす存在」としていろいろ活動する人間の空間的・時間的発展の諸事実」（岩波文庫版七二頁）という風に規定するが、この場合「共同体をなす存在としての」という言葉が一片の空虚な形容詞にすぎなかったことは、ベルンハイム自身につき論証するに何ら困難ではないが、むしろブハーリンによって何より卒直に表明されているのを見る。すなわち、「一般的に云って、科学なるものは二つの目標を立てることが出来る。科学は、一定の時代に一定の場合にあったもの、又は現にあるものの記述に従事するか、それとも諸現象の法則を抜き出そうと努めるかである。前者の場合には科学は個体記述的性質を帯び、後者の場合には法則定立的性質を帯びる」（「金利生活者の経済学」）。この「純粹記述」科学としての史学の規定は、対象の問題を事実の上で完全に抹殺することで成立する。換言すれば世にありとあらゆるものが残りなく史学の対象たるべきであり、一切の史料が撰択の餘地なく歴史家の素材

たるべきであり、一般史としての歴史とならんで（ならんで、或いはそれから独立して、あるいはそれを否定しつつ）あらゆる「側面における」無限に分化する個々の歴史の独自の存在がゆるされ、単に一片の史料そのものの提出すら「歴史家」としての在籍証明書となるというすさまじい事態が成立したのである。かかるすさまじい事態への理論的辯護はブハーリンにより始めて与えられたものでもとより無い。「経験的現実」は、もしこれを普遍という立場から考察すれば自然となり、もしこれを特殊という立場から考察すれば歴史となる」という有名な文句で、対象としての歴史を規定したものはリッケルトであった。このリッケルトと「殆んど全く一致している」と自称するマイヤーの史学では、「歴史の職能は、いつか一度現実世界に起った事変の経過を、究明し表現叙述することである」——史学の対象は「いつか一度現実世界に起った事変」であれば足り、ランケの言葉なら *wie es eigentlich gewesen*（事実は一休どうあったか）の「Es」であろう。「対象」の無規定性はまことに「非科学性」の立派な証明であった。

かくいえばおそらく、人は同じマイヤーの主著によって、手いたく私を反駁することができる。曰く、エドゥアルト・マイヤーは歴史的なものを「影響あるもの」*wirksam*と規定したではないか。歴史の関心の対象となる一個人、一民族、一国家、一文化、「これらの対象の如何なるものも、それが嘗てひとたび世界のうちに在りもしくは在ったという理由で純粹にそれ自身のために関心を喚び起すのではなく、却って唯それが及ぼした且つなおよびしつある影響のために関心を喚び起すのである」。「現存する諸状態はそれ自身として決して歴史の対象でなく、却って唯それが歴史的に影響ある限りに於てのみ、歴史の対象となる」と述べているではないか。

いかにもこのようなものがマイヤー史学における「対象」の規定であった。その証拠には、かくのごとき対象規定そのものにおいてマイヤー史学じたいが立派に叙述されているのを見るから——すなわち、「歴史は何らの体系的な科学ではない」という、また「多年の歴史研究に於て、私自身、いまだ嘗て歴史法則を発見したことがない」という、歴史的相対主義の理論そのものが凝集されているからだ。かくて茲では「対象」は規定されているのではなく撰択されているにすぎない。なぜなら、それじたい法則性を具有せざる対象、主観からの独立性をもたないような具体物は、凡そ「科学」——「科学」に尻をまくったマイヤーにむかつては風馬牛かもしれないが——の対象たりえないからである。対象を規定し得ないからこそ彼等はこのんで対象を撰択する。だが、撰択しうる対象とは、せいぜいのところ——唯一に合理的な意味に於いてならば「主題」のことではないであろう。

さて、科学的歴史記述にとっての対象規定は、史的唯物論の理論そのものとして与えられている。唯物史観が世界観であると同時に歴史学の第一次的方法論たりうる所以も、またここにあったのである。唯物史観の最初のもたまった叙述といわれる「ドイッチェ・イデオロギー」は、ドイツ的観念形態特に「ドイツ的歴史叙述」——すなわちヘーゲルまでの歴史哲学と及びフォイエルバッハにいたる後期ヘーゲリアンの歴史哲学——の直接的批判を目的として、なによりまず史的唯物論の基本的諸命題を「一切の歴史叙述」の「出発点たる諸前提」の解明として——「なんら恣意的なものな

く、なんらドグマでなく、ただ空想においてのみ人はこれを度外視しうるような、現実的な諸前提の解明として、換言すればここにいうところの対象規定として、与えているのである。

「この観方は無前提ではない。それは現実的な諸前提から出発し、一瞬といえどもこれを見離さない。この観方の諸前提とは、なんらか空想的に孤立せしめられ固定せしめられた人間ではなく、現実的な・経験的に観察されうる・特定条件下の・発展過程に於ける人間である。この活動的な生活過程にして叙述されるや否や、歴史は最早、かの（眼界の狭い）自身なお抽象的な経験論者たちに於けるような、死せる諸事実の蒐積たることをやめ、あるいはまた、観念論者に於けるような、空想的な主体の空想的な行動たることをやめる。

かくて、思辯のやむところ、現実の生活において、そこに現実的な実証的な科学が、即ち人間の実践的活動の・人間の実践的な発展過程の叙述がはじまる。意識についての饒舌は影をひそめ、現実的な知識がこれに代らねばならぬ。独立なものとしての〈科学〉哲学は、現実の叙述がなされると共に、その存在の媒質を失う。哲学の代りに現出するものありとせば、およそそれは、人間の歴史的発展の観察から抽象して得られるところの最も一般的な諸結論の總括である。これらの抽象は、それ自体としては、現実の歴史から切り離されては、全然なんらの価値ももたない。それらのものはただ、歴史的諸材料の整理を容易にし、その個々の層の序列を示唆するに役立つことができる。けれどもそれは決して、哲学のごとく、歴史的諸時代がそれに従って切り盛りされ得るような処方箋もしくは図式を与えるのではない。それどころか、困難はまさに、ひとが（歴史的）諸材料——過去の時代であれ現代であれ——の観察と整理に、（種々なる属の現実の實際的関聯の探究に、従事すると

きに)、現実的な叙述に、従事するとき、そこにはじめて生じるのである。これらの困難の〈解決〉除去は、種々様々の前提によって条件づけられているのだが、それはここで挙げうるていものではなく、却^{かえ}って各々の時代の諸個人の現実の生活過程及びその実践的活動の研究を俟^まって判明するものである。ここで我々は、我々がかのイデオロギーに対抗して使用するところの、この種の抽象の二三を取り出し、そしてそれを歴史的諸事例について説明してみよう^(二)。

(一) 「ドイツチェ・イデオロギー」岩波文庫版では五〇―五二頁。

アドラツキー版では、右文の直後から「歴史」なる節に移り、そこで「生産力、社会状態および意識、これら三つの機契」についての説明が行われている。すなわち生産力生産関係(及びその總和としての社会経済的構成)・社会的意識形態(及び上部構造)等の諸命題が、「この種の抽象の二三」として、即ち「歴史的諸材料の整理を容易にし、その個々の層の序列を示唆するに役立つ」——ブイコフスキー的課題の真に合理的方法的側面——ような「一般的帰結の總括」の一部として与えられているのである。史的唯物論の理論が歴史研究の一般的方法であるといわれる場合、人々は多かれ少なかれもっぱらこのへんの事態を考えているのであるが、ここで強調されなければならないことは、この種の諸命題(諸「抽象」・諸「帰結」)の「方法」的意義——詳言すれば、歴史家が対象を処理する場合の方法としての意義は、「現実的な・經驗的に觀察されうる・特定条件下での発展過程における人間」・換言すれば物質的生産の特定発展段階上における人間・という対象規定から不可分なものであるということである。かくて、最も完璧な形にまで要約された場合の史的唯物論の命題と

しての、「経済学批判序文」のいわゆる公式の冒頭の一節で、対象規定と対象を処理するための方法とは、既に間然するなき統一に於いて与えられているのを見る。本来、対象規定とは方法からの要約であると共に、方法の叙述に於ける出発たるべきものであり、したがって方法それじたいであり、方法の總括であるからだ。対象を規定するということは、同時に対象を処理する仕方のエスプリたるべきものである——ヘーゲルの命題の唯一の合理的理解は、かかるものとして与えられると考える。

(二) アドラツキー版の篇列は、

一 フォイエルバッハ。唯物論的見方と観念論的見方の対立。

A イデオロギー一般、特にドイツ的。

1 歴史

2 意識の生産について

B イデオロギーの現実的基礎

1 交通と生産力

2 国家及び法律の財産に対する関係

3 (自然生産的及び文明的生産要具と財産関係)

C ××××〔伏字〕。生産と交通形式自体

そのうち、書題本来の任務たるところのフォイエルバッハを主題とするドイツ的観念形態の直接的批判の仕事は、殆んどもっぱら「2、意識の生産について」に於いて試みられているばかりで、爾餘は唯物史観の積極的展開に捧げられている。「A、イデオロギー一般、特にドイツ的」の序論的部分、即ち「1、歴史」の直前に来る部分では、物質的生産の諸様式及びこれに対応する財産形態として、(一) 種族財産。(二) 古代的財産。(三) 封建的又は自分的財産。(四) 近代資本的財産、但しこれの叙述与えられていない)、之を要するに、後年「経済学批判」序言中に、社会経済的構成の進歩の諸段階として要約したところ

のものが与えられており、「1、歴史」の一節では、「人間の歴史的発展の観察から抽象して得られるところの最も一般的な諸結論の總括……（前出）……これら抽象のうちの二三」についての説明を与える。すなわち「生産力、社会状態及び意識、これら三つの契機」についての分析的説明が「1、歴史」の主内容となっている。そしてB及びC章はこの「1、歴史」の節のさらに精細な展開にあてられていると考えることができる。

なお、アドラツキー版「ドイツチェ・イデオロギー」邦訳は、唯物論研究会の訳本としてちかく出版を約束されているが、さしあたり読者は「唯物論研究」第五号所収の拙稿により、岩波文庫版（リヤザノフ版）からアドラツキー版を再構成することができる。

「人類はその生活の社会的生産に於いて、特定の、必然的な、彼等の意志から独立せる関係に入りこむ。すなわち、彼等の物質的生産、諸力の特定の一発展段階に照応せる生産、諸関係、これである。

これら生産諸関係の總体は社会の、経済的構成を形成する。これ、一の法制的及び政治的上部構造がその上に聳立し、特定の社会的意識形態がそれに照応するところの、現実の基礎である。

物質的生活の生産様式は社会的、政治的及び精神的な生活過程一般を条件づける。人類の意識がその存在を規定するのではなく、むしろ却って人類の社会的存在が彼等の意識を規定する」。

歴史記述の学——史学のための対象規定は、ここでは対象の構造的規定として与えられている、（それに就いて、人々が知るように、構造の辯証法が与えられている）。ところで一般に歴史的な社会諸科学——経済学、法及び国家の理論、イデオロギーの理論等々は、唯一の具体物としての歴史的対象のこれら構造的規定性の各側面について成立するという風に考えられている。例えば経済学は社会経

済的構成を、あるいはいわゆる下部構造を——対象とし、法及び国家の理論は法制上及び政治上の上層建築を特別の対象とする、という風に、この考え方は、後で特に経済学について述べるように、おそらく厳密な意味では正しくはないであろう。歴史的社会諸科学はむしろ、対象を分析的に領得するための夫々の階相それぞれであり、ひらたく云えば手順である。これに対して科学としての歴史記述は、すでに分析的に領得された全姿に於ける対象の最後の仕上げ——もとより「頭脳の内部における全体」としてのそれ——であるといえよう。だがこの問題についてはさらに次章でくわしく扱うこととして、さしあたりここでは、しからばかくのごとき「全体」としての対象は、——それは無限に具體的な存在であり、ある哲学に云わせれば「生」であり、「無限」であり「いま」であるというほどしかく盡未来済的な複合体であるものを、——歴史記述においては抑々そもそもいかにして一時に全体を処理され能うあたのであろうか、という問題に答えておかねばなるまい。

第一に、史学は決して、それじたいとして、一定の順序をふまず一足飛びに、この対象を処理するものではない。

かくの如き全体としての具体物を把握するための方法じたいが、歴史学のためにこの具体物を対象規定した唯物史観そのものに於いて与えられているということは、すでに述べたが、これら方法はさらに展開されて、各社会諸科学に固有な方法となる。歴史的社会諸科学は、本来かくて歴史学の対象を把握するための「理論」であり、経済学はそのうちの就中なかんずく基幹的な位地に居る。けれども経済学は、それじたい歴史学では決してない。歴史学の対象は、あくまでも、与えられたる構造的規定性における具体物そのものであるのだから。換言すれば、社会諸科学はそれぞれの序列と限界とに於いてこ

の具体物を規定する。けれども歴史はつねに全体としての具体物じたいの規定を求める。この間に於ける、歴史的諸科学の地位と役割とを、仮りにここでは対象の質的规定、やや哲学風に云えばその質的自己限定に於ける対象の領得といっておく。第二に、史学は決して一時に「全体」としての対象を扱うものでも、扱い得るものでもない。対象の複合性が無限であるとすれば、御このみの哲学者がいうように、無限はつねに自己を限定しつつあらわれる。ところで歴史的具體物は歴史家に対して、自己を限りなく限定しつつ立ち現われる。「限りなく限定する」というはいかなる意味か、社会諸科学に於ける具体物の対象規定は、具体物の質的自己限定であるのに対して、この場合は量的な自己限定であるが故に無限の限定というのである。「ブリュメール十八日」「ドイツ農民戦争」、「家族、私有財産及び国家の起源」、「猿の人間への……」。これらすべていうところの量的自己限定であるだろう。

——対象が所属する時代が夫々それぞれ違うだけではないか。「時代区分」はむしろ対象の質的自己限定ではないか？——

よろしい。「時代区分」そのことについてはあとで述べよう。然らば今度しかは時代区分の問題を完全に抽象して、単なる量的自己限定として下の如きは如何——即ち「五月三十日の議会に於けるカンプレハウゼンの声明」、「ポーランドの新分割」「フランクフルトに於ける暴動」、「ウィーンにおける革命」、「イタリアに於ける英佛協定」、「ゴットシャルク及びその他の同志に関する訴訟事件」其他等々、等々。——同一時代ではあっても、すべてこれらは「新ライン新聞」に載った政治評論で、なんら歴史ではないではないか！——

「新ライン新聞……では、この理論はつねに、同時代の政治上の出来事を説明するために利用せら

れた」というエンゲルスの言葉を挙げた以外には、歴史記述と政治評論との同一性の契機については、なるほどまだ殆んど何事も陳べてなかつた。それなら、「仮りに」これを夫々の歴史記述と見ることにして論じよう。この場合、一八四八年―四九年に与えられていたところの単一の歴史的具体物は、単に量的な限定を受けているにすぎない。質的にはどの場合にも、つねに対象はその全姿に於いて把握されていたからである。さきにあげた一列の事例の場合でも、「時代区分」という問題を抽象してみれば、同一のことが云われうる。さらに手近い事例で云うなら、十九世紀初中期における歴史的具体物を――かく「時代区分」的に自己限定せる我等の対象を特に「明治維新史」として歴史記述する場合すでにそれは量的限定の下にある。況んや更にもっと無限にそれは限定されて、「奥羽戦争」とも「西南戦争」とも、「地租改正」とも「廃藩置県」とも、「明治初年農民騒騒」――「録」ではなく――「史」とも、「大久保利通」とも、なりうるのである。だが、そのいかなる細限定の下においても、科学としての歴史記述たらんがためには、つねに対象は質的全姿に於いて把握されなければならない。記述は対象的把握に於ける記述として現われなければならない。これらすべての場合に於いて「大久保利通」、「明治維新」、「ブリュメール十八日」、「ゴッドシャルクに関する訴訟事件」等それじたいは抑々「対象」であろうか。量的に限定された場合の対象は、すでに対象とよばれることをやめて「主題」と呼ばれる。主題の撰択はもとより歴史家にとって自由ではない。

二 歴史学の対象と経済学の対象

すでにいかなる量、いかに微小なる「主題」に於いても、対象はその質的全姿に於いて与えられて

いること、換言すればいかに微小なる「主題」といえどもこれを「歴史」として処理するためには全体としての質的規定性に於いて叙述しなければならぬということ、を明らかにした以上、さらにここでは対象の質的限定の問題に、より仔細に立入らなければならぬ。その場合経済学が、決定的な位置につく。経済学を措いて対象の質的規定性をあきらかにする手段はありえない。なぜなら経済学こそは、対象の本質的諸契機を、特に質的に限定された対象としてもつものであったから。

経済学の対象は、与えられたる具体物としての歴史的事実の「土台」をなすところの社会経済的構成であるといわれている。この命題の真実の意義については本節の叙述につれてあきらかになろう。ところでマルクスは「経済学批判序説」中の「経済学の方法」なる一節で、対象としての歴史的具體物を科学的に処理する方法に於いて経済学が占める位置と限界とを規定していると私は考える。

このことを明らかにするために、何よりもまず、この重要な一節の中で屢々繰返されている言葉「具體物」、「全体」、「實在的な主体」、「主体たる社会」、「主体としての近代資本主義社会」等々は、いずれも私がこれまで述べ来たところの「具體物」即ち、本来歴史学の対象をなすところの歴史的具體物を意味していることを注意しておかねばならぬ。

「頭の中に思想上の全体として現われるがごとき全体は、自己にとつて唯一可能な方法に於いて世界を領得するところの、思惟する頭の所産であり、即ちその方法は、此の世界の芸術的・宗教的・實際的・精神的領得とは異なるものである。實在的の生体は依然として頭の外部にその独立性にお

いて存在する——即すなわち頭あたまがただ思辯しべん的にのみ、ただ理論的にのみ、振舞う間は。だから理論的方法に於いてもまた、主体したいたる社会しやかいが、前提として絶えず想像じやうざうに浮んでいなければならない⁽¹⁾。

(一) 「経済学批判」S. XXXVV 改造社全集第七卷四〇一頁。

ここにいう「全体」は「生きた全体、即ち人口、国民、国家、諸国家等」（例えば十七世紀の経済学者達は、つねに、生きた全体即すなわち人口、国民、国家、諸国家等を以て（その研究を）はじめた）であり、従前のべたところの史学の「対象」たり又は「主題」たるものにほかならない。マルクスの設問はむしろかくの如き「全体」又は「具体物」を領得するための「経済学の方法」はいかなるものかにかかっていたのである。そして彼の帰結はつぎの如きものであったことを人々はよく知っている。

「一般にいずれの歴史的社会科学にあつても然しかることく、経済的諸範疇しよはんちゆうの行程に於いてもまた下のことを牢記すべきである。すなわち、現実げんじつに於けると同じく頭あたまの中でもまた主体——ここでは近代きんたい的市民社会——が与えられているということ。そして、諸範疇しよはんちゆうはそのゆえに、この一定の社会の、この主体の、存在形態、存在規定を表現し、且かつつ屢々しばしばその個々の側面のみを表現するにすぎないということ。そして、それゆえにまた科学的には、現実げんじつにその呼声こゑを聞く場所からその筆を起してはならないということ。これらの事を牢記しなければならぬが、その所以ゆゑんは、これが経済学の篇別に決定的なものを与えるからである」。

「かくて、経済的諸範疇しよはんちゆうを、歴史上それらが規定的存在であつた順序にしたがつて継起せしめることは、出来がたいわざでもあり、間違つてもいるであろう。むしろその序列は、それらが近代的市民社会に於いて相互に対して有するところの、関係によつて規定され、そしてこの関係は、自然的情態

における関係と見えるもの、あるいは歴史的発展の順序に適應する関係の、まさに反対である。茲で問題なのは、経済的諸関係が種々なる社会形態の継起のうちに占むるところの地位ではない。……むしろ近代的市民社会の内部におけるその（経済的諸関係の）編成が問題なのである」。

（ここではわざと、カウツキーが勝手に挿入した「経済学は」という註釈的主語を脱いて訳出してみた。……“und daß die Kategorien daher Daseinsformen, Existenzbestimmungen, oft nur einzelne Seiten dieser bestimmten Gesellschaft, dieses Subjektes, ausdrücken, und daß [die Ökonomie] daher auch wissenschaftlich keineswegs da erst anfängt, wo nun von ihr als solcher die Rede ist.”

テキストを単に文法的に解釈してみただけでも、カウツキーが挿入した主語〔die Ökonomie〕は〔die Kategorien〕でなければなるまい。況んや、単なる文法的解釈から離れて内容的な理解の上から見る場合、〔諸範疇は〕と解釈することによってのみ始めて前後の意義があきらかにされうることは、ここに対照的に示した二つの引用文を彼此照合することで一層明瞭であろう。カウツキーに従って「経済学は」と主語する場合、いかに内容上無意味な、不可解な文章が生れるかは、左例について認められる。

「だから〔経済学は〕また、経済学としての、経済学が問題とされるときに始めて科学的に開始されるものではないという事」（宮川氏訳本、一九二六年初版本）

「そして〔経済学は〕それだから科学として、もまた決してそれがかか、るもの、になったと今云われている時に初めて起源するものではないということである」（改造社会集、第七巻）

私がここで与えた訳文も、決してほめたものではないが、カウツキー挿入の「経済学は」の主語を、仮りに全然なにもものとして訳出した場合の試図にすぎない。モスクワ版を参照する機会がないのは遺憾だが、この点はそこではどうあろうか。

マルクスの解答は、特定の具体物——ここでは近代資本主義社会としての具体物——を領得するための経済学的方法は、その具体物に於いて支配的な性格を帯びるところの経済的範疇はんちゆうを以てしなければならぬというに在ったのである。右に挙げた二個の同一命題を——は積極的に表明した章句の、相互の中間を埋める一文はこのことを端点に述べることから成っている。

「例えば地代から、土地所有から始めるくらい自然なことはないかに思える。何となれば、それはすべての生産すべての存在の源泉たる土地と結びついており、且つ多少とも定着せるすべての社会の最初の生産形態たる農業と結びついているからだ。しかしこれほど間違つたことはない。あらゆる社会形態においては、すべての生産に優越し、従つて、その関係が爾餘のすべての関係に夫々の地位と勢力とを割当てる、ところの或る一定の生産が存在する。

それは一の一般的照明であつて、爾餘じよのすべての色彩はそれに浸され、その特殊性にしたがつて修飾される。それは一の特特殊なるエーテルであつて、その中に現われるあらゆる存在の比重を決定する」。

一例をとれば、古代及び封建社会の如く定着的農耕が支配しているところでは——と、マルクスは続ける——工業も、その組織も、その所有形態さえも、多少とも土地所有的な性格を帯びる。中世では資本そのものすら、伝統的な手工道具等としてこの土地所有的な性質を帯びていたのである。

「市民的社会においてははこの逆である。農業はますます単なる一産業部門と化し、全く資本によって支配される。地代にしても同じことである。土地所有が支配している一切の形態においてはなお自然関係が優勢である。資本の支配するところの諸形態に於いては歴史的に創出された社会的要素

が優勢である。地代は資本を理解せずしては理解し得ない、しかし資本は地代を理解せずして十分理解することができる。資本は資本家的社会のすべてを支配する経済力である。それは出発点をなすと共に終局点をなさねばならず、そして土地所有に先んじて展開されなければならぬ。両者が特別に考察されてのち、その交互関係が考察されねばならぬ」。

与えられたる具体物たとえば近代資本制社会を領得するためには、経済学は、所与の具体物の物質的生産に於ける「一般的照明」たるごとき支配的範疇はんちゆうから、たとえばこの場合は「資本」から出発するばかりでなく、出発してさらにそこへ帰ってこなければならぬ。この「方法」的命題の中にこそ、経済学が、対象としての具体物の質的規定性をあきらかにする科学たることがまず明示されている。経済学が対象を質的に規定するということは対象を歴史的規定性に於いて、把握することである。なぜならさきに見たごとき「経済学の方法」は、経済学をしてつねに特定の歴史的社会構成体の解剖学たらしめ、同時に二個の、いむ沉んやすべての、歴史的發展段階上の具体物を、一般的に扱うような科学たらしめないからである。経済学は一方で、史学に於いてふるい歴史をもつところの發展段階の理論に対して、はじめの一の客観的な根拠を与えることができたが、これは夫々の経済学がそれじたい対象としての特^{それ}定發展段階に——かつそのみに——固^{それ}有なる解剖学たりうることで可能になったのである。マルクスは「序言」の唯物史観のいわゆる公式の最後のところで、——すなわち先ずその構造的規定性としての対象規定から出発し、ついで対象の辯証法を与え、その最後に——「我々は極く大づかみに、アジア的の、古代（ギリシア・ローマ）的の、封建的の、及び近代資本家的の、生産様式を以て、経済的社会構成の前進的な諸時代とすることができ。資本家的生産様式は、社会

的生産過程の敵対的形態を採れるものの最後である云々」と要約を与えているが、このすべての発展段階・すべての社会経済的構成を通ずるような普遍的な一個の経済学がありえないと同様に、また夫々の発展段階をその歴史的序列に於いて辿るような別個の経済学もまたありえない。「経済的諸範疇を、歴史上それらが規定的存在であった順序にしたがって継起せしめることは、出来がたいことでもあり、間違つてもいるであろう」という、先に挙げた引用部分の、辯証法的な意味を、ここでもはつきり掴んでいなければならない。諸範疇の歴史的展開と諸範疇の歴史的規定性に於ける展開とは、相互に相容れないばかりか、むしろ互に逆の關係に立つという命題は、史学と経済学の辯証法を最も端的に語るものであった。この点をも少しくわしく見よう。

経済学は与えられた発展段階の物質的生産に於ける支配的関係を基準として構成される。その結果、同一の範疇であっても異なる経済学に於いては異なる意義と色彩に於いて見出される。たとえば、さきの引用に於ける「地代は資本を理解せずしては理解できない」を前後の構成から切離してそれだけ取り出すとその意味はすっかり神秘化されてしまうだろう。蓋し、対象が封建的社会経済構成たる場合には、地代はそれじたいとして理解されるばかりでなく、却つて逆に資本こそ地代を理解せずには充分な理解に到達しない——「中世では資本そのものが——純粹の貨幣資本でない限り——伝統的な手工道具等としてこの土地所有的性质を帯びていた」のだから。かくて地代は資本を理解せずしては理解できないという命題はただ「資本が支配する（社会）形態においては」という前提の下でのみ、合理的である。「同一の範疇が、異なる社会段階に於いては、異なる地位を占むる」という認識、そのような差異性の質を規定する点に「経済学の方法」があるという指摘、こ

れこそマルクスがこの節全体にわたって繰返えし注意するところであり、さきにあげたこの節の結論部分が、要約しているところであった。(かかる質の究局的規定は人々が知るところとく生産様式の解明によってあきらかにされる。だがそれについては、いま述べるところではない)。かくて経済学なるものはつねにいずれかの特定発展段階上の生産様式——生産関係——社会経済的構成に固_く有_るな発展法則の学であり、換言すれば近代資本主義社会の経済学(独義の経済学)であるか、封建的理論経済学であるか、古代的理論経済学であるか、等々であった。^(二)だがまさにそのことのために個々の経済学は、人類の物質的生産の「歴史的発展過程をその種々なる階相_{フアーゼン}に於て追跡する」ような別個の科学たりえない。この後のものは然_{しか}らば個々の経済学を単に積み重ねることで成り立つであろうか——もとより否。この後のものはすでに諸範疇_{はんちゆう}じたいの具体的発展を扱わねばならぬ、という一事だけで「経済学の方法」と矛盾せざるをえないのだから。

(一) エンゲルスは「反デューリング論」第二篇第一章で、これらの諸経済学を總称して、「前市民的・理論的経済学」(die vorbürgerliche theoretische Ökonomie)と云っている。

「ブルジョア経済学に対する如上の批判を完全に遂行するには、生産、交換及び分配の資本主義的形態を知るのみでは充分でなかった。この形態と並んで未発達_{うんたつと}の諸国には今日なお存在する諸形態もやはり、少くともその粗枝大葉だけは研究され、比較照合されなければならなかった。かような研究と比較とは、今までのところ、大体において独りマルクスによって為されたのみであり、従つて、前市民的理論経済学の上で今日までに建設を見たところは、殆んど全部彼の研究の賜であった」(改造社全集第十二卷三二四頁)。同じ場所でエンゲルスが「広義の経済学」と述べているものは、もしそれが「経済学批判序説」に、「第一に、一般的抽象的規定が展開されるべきである。これらの諸規定は従つて多少すべての社会形態に通ずる。併し以上説明した意味に於いてではあるが」という場合の一般的理論で

ないとすれば、右にいわゆる、「前市民的理論経済学」を指すものであろうし、そうだとすれば既にそれは単一なる一個の経済学たりうるものではなく、「狭義の経済学」が資本制生産様式を固有の対象として形成されるように、各経済的構成に夫々固有な合法則性を追及するところの、相互に異なる理論経済学の体制をなすべきものであると考えられる。

マルクスは「経済学批判序説」の初節の中でみずから設問していう、「だから我々が生産というときには、それは常に或一定の社会的発展段階における生産——社会的個人の生産を意味する。だから苟くも生産について語らんがためには、我々はその歴史的発展過程をその種々なる階相フレイゼンに於て追跡しなければならぬか、あるいは前以て、我々は一定の歴史的時代、従つて例えば本書本来のテーマたる近代市民的生産をのみ取扱うことを明かにするか、その何れかであるべきように思われる」と。そしてこれに対する彼自身の解答は、——「序説」全部が、いわば此の問題への解答として展開されているのだが——後の方法のみが唯一の「経済学の方法」たるべきものだというに於ては、もはや説明するまでもないであろう。

これに対して、「生産について語らんがために……その歴史的発展過程をその種々なる階相に於いて追跡」する唯一の科学は、科学としての歴史記述の基根部門としての経済史である。経済学に於て対象の質的規定は諸範疇はんちゆうの歴史的規定性として与えられる。これが与えられてのち始めて、諸範疇の歴史的展開が可能になるからである。いま狭義の経済学としての「資本論」に就いて見よう。

資本論の固有の対象は、第一版序文で明瞭に規定されているように「資本家的生産様式とそれに対応する生産及び交換の諸関係」であった。このことは資本論が、「主体」としての「近代市民社会」の

運動法則を領得すべく、「経済学の方法」にしたがって、特に、その「一般的照明」たるごとき生産様式を、そしてそののみを、固有の対象として限定していることを意味する。現実の主体たる具体物としての近代市民社会は、「生産の最も発達せる最も多様な歴史的組織体」であり、「すでに没落し去ったすべての社会形態の廢墟と要素との上に築かれ、これら諸々の廢墟と要素は、或いは未だ克服されざる遺物としてその中に餘命を保ち、あるいは単なる暗示にすぎざりしものが全幅の意義にまで発展してしまっているという風である。換言すれば、全複合体としての現実の近代市民社会の生産諸関係の中には、前時代から持ち越され、「一般的照明」の下に変色されつつ残存せしめられているような諸多の關係が含まれると共に、前時代の社会形態にあつては単に暗示にすぎなかつた要素が全幅の展開に到達して、この「照明」者たる位置に就いたものとして——資本制生産様式及びこれに対応する生産關係として存在する。だが資本論の固有の対象は、この後の決定者の關係にのみ限定されているのである。

「だが現実の社会経済的構成は決して「理想型」的に純粋なものではない。例えば封建社会の内部には従属的なものとして前階級社会の生産關係や奴隷所有が残存すると共に、やがて後には資本主義的生产關係が生成する。また資本主義社会の内部には多かれ少なかれ封建社会の遺制や、また往々にして奴隷制の遺物が残存する。このように、一定の社会経済的構成の質を規定する生産關係——その構成における支配的な生産關係——に従属して、その社会構成の内部に存在するところの、旧い社会構成の遺制や、生成途上の新しい質の生産關係の体系は、ロシア語で特にウクライド (Ukrad) と呼ばれる。このウクライドの存在によって社会経済的構成は何らかのモディフィケーションを受

けるとはいえ、しかしそれは単なるウクラードがその社会の発展において決定的な役割を演じるということの意味しない。かかる役割を演じるところの生産関係はもはや単なるウクラードたることを止める」。(永田広志「唯物史観講話」二四八―九頁)

他のウクラードを従属せしめる支配的なウクラード、これは特定生産様式に照応するところの生産関係であり、「生産様式」である。蓋し^{けだ}生産力の客観的要因たる生産手段と主観的要因たる労働力との結合様式は、それじたいにおいて、生産力とその歴史の規定性たるごとき生産関係との、矛盾にみてる統一であったから。「なおこの点については永田氏前掲書二三八頁以下。ミーチン「史的唯物論」邦訳書一七六頁以下。ムシュペルト「資本論の対象」(「マルクス記念論集資本論研究」所収)等を参照。」この意味において「生産様式」の概念をもろもろのウクラードを含むところの「社会経済的構成」の概念から区別することができる。前者は後者の本質であり、質的规定者であり、歴史的规定者であった。「大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的及び近代市民的生産様式をもって、経済的、社会構成の progressive Epochen として徴示することができる」という場合の「生産様式」と「経済的社会構成」の、辯証法的関聯を見るべきである。

そこで資本論の固有の、対象が「資本家的生産様式」だということは、経済学としての資本論が所与の具体物としての近代市民的社会に、したがってまた現実の市民的、社会経済的構成に、それじたい無関心であることを決して意味するのではなく、却^{かえ}ってそれを領得せんがための不可避的な限定であったということは、右に述べたところから既に明らかであろう。かくて資本論は現実の市民的、社会経済的構成の全具体性を直接、自己の対象とはしない。その中にウクラードとして含まれているような

「色々な歴史的形態の土地所有を分析することは本書の限界外に属する」とマルクスは地代理論を起筆する（第三卷第六篇第三十七章）。「……茲に展開するものとは異った土地所有及び農業形態（封建的土地所有なり、又は自家生計のために経営される小農的農業なり）」が従前存在しており又は今尚^なお存在しつつあるとの主張を持出す者があるとしても、かかる主張は我々にとっては全くどうでもよい」。

資本論で扱われる地代はもっぱら単一の歴史的範疇^{はんちゆう}としての資本主義的地代——「農業上の資本制生産様式及びこれに照応せる土地所有形態」のみに限られる。そしてこの特殊歴史的な地代範疇^{はんちゆう}の本質が餘すところなく規定されてのち——資本論第三卷第六篇の最後の一章を除く全部。それについても本質を規定するということはいかに多難な複雑な分析の行程であるか！——そののち始めて、この本質の歴史的始源^{しげん}が問題とされ、既に本質が知悉^{ちしつ}されてあるという前件に拠って始めてこの問題の解決が可能となる。「資本制地代の発生」の章が第六篇の最後に位置するのはこのためである。「本書の限界外」に置かれた本来的地代の諸形態はこの最後の手順の場所で呼び帰えされる。だが、なおまだそれじたいのためにではなく（その任務を負うものは封建理論^{かえ}経済学である）、却^{かえ}って実に「資本制地代の発生」を明らかにする目的のために。

地代についていま述べたところは、同時に資本論で扱われているすべての範疇^{はんちゆう}の各々について、及び資本論全体について、残りなくあてはまる。たとえば第一卷第二篇第一章「商品」に於いて、そのための歴史的展開が省察されるのは最後の節「商品の魔術性及びその秘密」に於いてであった。さらにたとえば、資本家的生産様式そのものの歴史的展開（手工業からマニファクチュアへ、さらに

大工業への発生及び発展の序列)は、既にその本質が分析され終つてのち、はじめて第四篇に於いて与えられており、さらに進んで、資本家的生産様式が発生するための歴史的前提條件の究明は資本の生産行程を扱う第一巻がまさに終らんとするところで(第二十四章いわゆる本来的蓄積)はじめて与えられるという風に。

諸範疇はんちゆうの歴史的展開はいつでも最後の到達点としてあらわれている。「人類生活の諸形態に関するナッハデンケンナッハデンケンしたしたが思し察さつ、随したがつてまたこれが科学的の分析は、總じて現実に於ける発展に反対した進路をとる、それは後方から(post testum)、すなわち発展の完成された形態を以て、始まる(二)」とマルクスはこれを定式づけている。「研究とは材料を細大洩れなく領得し、その種々の発達形態を分析し、これらの形態の内部的紐帯を探究することである。そしてこの仕事が完了した後、はじめて現実の運動は適応的に叙述されうる」という場合も同様である。叙述に於ける、即ち概念に於ける、諸範疇はんちゆうの展開は、すでに、諸範疇の本質が研究を通じて、領得されたのちに、於いては、諸範疇はんちゆうの現実的歴史的運動に適應したものでなければならぬ。だが、諸範疇はんちゆうの本質に到達する研究の順序は、これと反対に「後方から、すなわち発展の完成された形態を以て」始まらなければならない。

マルクスは資本論第一巻で資本制生産様式それじたいの史的展開を与えるところで、「他の生産様式に於けるよりは多数の労働者が、同時に、同じ場所で(或いは同じ労働範疇で、といつてもいい)同一種類の商品を生産する目的を以って同一なる資本家の命令の下に働くということは、歴史的にも、概念的にも、資本制生産の出発点を成すものである」と記している。「生産様式それじたいについていえば初期のマニファクチュアの如きは、同一の資本に依つて、同時に多数の労働者が使用さ

れるという一事を除けば、殆んどツンプト的手工業と異なる所なく、ただツンプト親方の作業場の拡大されただけのものに過ぎない^{三〇}。

ところで「歴史的にも概念的にも」協業から、初期の資本制生産様式たる端初的マニユファクチュアから、出発する、という仕方は、資本制生産様式の本質——歴史的規定性としての——に到達するための研究の方法・分析の順序・さきに繰返えし述べた「経済学の方法」・資本論じたいがその篇別を以て定式化している順序・のまさに逆のものであった。「資本制生産様式」の本質を領得するための「経済学」的分析は、したがって篇別は、決して「協業」からは始まらない。前の仕方は後の仕方の成果として与えられる。という点に両者の統一が認められる。

- (一) 資本論第一巻、改造社版、上、四五頁。
- (二) 同、第二版序文、同上、一四―五頁。
- (三) 資本論第一巻、改造社版上、三〇一頁。

最後に資本論全体についても同じことがいわれる。資本論の対象は「資本家的生産様式及びそれに照応する生産及び交換関係」のみに限定されていた。だがこの限定された対象の總行程に於ける内的関聯があきらかにされることで「近代市民社会の経済的運動法則を闡明する^{三二}」という資本論の「究極目的」（第一版序文）は一応達成されているのである。

もっとも、ここに「一応」というのは、資本論が現実にはなお豫定の篇別を終えず、資本制生産様式を表現する基本的階級それじたいの叙述に立到る直前で中絶されているためである。階級対立は資本論に限定された対象のための最終の仕上げであり、特定生産様式の内在的矛盾——生産力と無

関係の矛盾——に基く固有の発展法則は、最後に固有の階級関係の発展法則として仕上げをうけるべきであり、すべての「広義の」経済学即ち封建的・古代的等の各理論経済学にとっても同様でなければならぬ。しかしそれは最後の仕上げにすぎない。なぜなら、資本論に於ける出発点を成している商品をとってみても、所与の階級関係を前提としてもっており、この前提は商品分析の到達点として与えられているからである。具体的諸前提が、すべて「経済学の方法」においては、諸分析の到達点として与えられる、という点に、これまで述べたところの一切の意味が集約される。歴史の対象をなすものは最も具体的な具体物としての歴史的现实性であり、かくの如きものが史学にとつての前提である。このいみで対象とは總じて前提であるといえる。かくて経済学は史学と同じ具体的諸前提に到達するための、頭脳にとつて唯一に可能な方法に於ける第一着手、第一階梯の位置における科学領野として理解される。経済学にとつての固有な対象が、具体的總体の中からその「照明」者的存在たるものみに規定されるゆえんも、ここにあったのである。

三 経済史の方法と経済学の方法

資本論が全篇別の終局において、及び各巻の、各篇の、各章の、多難な分析の途の各最後において、限定された夫々の範疇それぞれはんごうの運動規則及び運動形態に到達しているということを以て、ただちに資本論がそのまゝ、「史学的著作」であると、云いうるであろうか？ マルクス五十年祭記念論集に収められている「歴史研究の指針としての資本論」と題する論文の中でネチキナは下の如く述べている。

「資本論は一の経済学的研究である。ところで資本論が経済学上の研究であるという所から、資本論が歴史家にとって有する意義を見定めるに当って、或は次のように云う者があるかもしれない——資本論には経済学的意義以外に他の方面——歴史的方面——がある、資本論には歴史に捧げられた特別の部分があると。

この主張は一見真理らしい外観を呈しているけれども、実は極めて不正確であり従って誤っているといわねばならぬ。資本論の史学的意義を評価するに当っての全困難はほかでもない次の点にある。それは資本論は理論経済学上の研究たると共に、それと、同時に、史学的著作であるという事だ、資本論の何処か或る一方面が史学的なのではない、そうではなく資本論の全体がそのままそっくり史学的なのである。このことはいう迄もなくマルクス主義の理論が歴史主義によって貫かれているということ、それは元来歴史理論であるということと、極めて密接に聯関している。まず此の事を明瞭にしよう、然るのちに資本論中に勿論存するところの、そしてどうしても歴史家が深く研鑽しなければならぬところの、個々の特に歴史的な叙述について論じなければならぬ」。(力点原文、邦訳「資本論研究」六八頁)

「資本論全体がそのままそっくり史学的だ」という命題と、「個々の特に歴史的な叙述」があるという命題との辯証法的関係を、ネチキナはこの引用部分でも、また爾餘の全部を以てしても、遂に充分には明らかにしていない。その結果として、「資本論は同時に史学的著作である」という命題だけが、謎のごとく人々の頭に残る。むしろ同じ論集に収められているムシュペルトの「資本論の対象に

ついで」の研究こそこの謎を解く鍵を与えていると思われる。ムシユペルトはそこで、資本論が特に資本家的生産様式を限定されたる対象としてもつことは、「近代（市民）社会の経済的運動法則をせんめい闡明する」という究局目的のための、いかに唯一に方法的な仕方であったか、という問題をめぐって考察している。だが豫定の紙数もあり、私はここでムシユペルトに立ち入っていることはできない。

所与の現実的な社会経済的構成——近代市民社会の具体的な経済的構成の認識に到達するために、狭義の経済学は「一般的照明」者たるごとき資本家的生産様式の解明に終始する。それにもかかわらず資本論の全巻において、各篇及び各章の最後において、資本制生産様式の外部に立つところの、本来資本論の範域の外にあるところの、そして現実の近代的社会経済構成の總体の内部にもろもろのウクライドとして含まれるところの経済的諸範疇はんちゆうが扱われている所以ゆえんは、資本論本来の対象たる諸關係諸範疇はんちゆうの歴史的発生、発展及び消滅の諸形態を問題とするためであった。これは経済学においてはつねに最後に問題とされ、方法上の到達点として与えられる。本来もっぱら資本家的生産様式の解明に限定されてある筈の資本論の中でたとえば封建的、生産様式の解明が——即ち封建的生產關係のための理論経済学が——最も集約的な形で与えられ、含まれざるをえない必然性がそこに見出される。かくて近代的生産様式の経済学としての資本論は、同時にまた、一たん自己の限界外に規定したところのウクライドの本質を解くための理論的な「鍵」——その各々を独立に展開するとき古代的・封建的等の各理論経済学の完成形態が与えられるような——を残りなく与えている。だが、繰返えし注意したように、これらすべてはいずれも経済学の構成及び方法における限界点・到達点に於いて在ったのである。

この限界点・到達点から改めて出発するもの——所与の具体物の具体的認識に到達する学問的行程の序列に於いて、出発点としての経済学が終るところから改めて始めるもの、これは経済史である。経済史は経済学の總成果——それは、既に見たごとく、それ自体の中に必然的に古代制・封建制経済学等を含まざるをえないような近代制経済学の体系である——を受けとつて、現実の社会的實在に立ち向う。

学問的認識の序列におけるこのような順序を、再び夫々の学問に固有な対象規定の問題として見るならば、経済史学^にに固有な対象は、現実的、總体性^ににおける、社会経済的構成であるといわれよう。ウクラードは経済学の範圍外におかれ、限界点において省察された。経済史学はしかし、すでにまとも、ウクラードを問題にしなければならぬ。

ウクラードは何よりまず先行諸形態からの遺物として存在する。これら遺物は、資本家的生産様式の「照明」下に立つことで、ひとしく資本制的諸關係の一色の外見を帯びているにもかかわらず——例えば残存せる封建的^的地代が表象の上では資本制的利附資本の利廻りと比較されて地価の決定に導く場合のように——その非資本主義的本質に於いて析出されること、資本制地代の^が、当該篇別の終局において、あらゆる解体の段階における本来の地代形態の^の解明に到らせるのと同様である。この解明は、理論的^的には、資本家的生産様式及び生産關係の^の發生及び發展の側面として究明されるが故に、それじたいにおいて、特定生産様式を対象とする理論経済学の「究局」的限界——端初の出発ではなく——をなしている。資本論に含まれているいわゆる「歴史的部分」なるものは、この^{かえ}いみで何ら特に史的、部分ではありえず、却つて^{かえ}経済学の限界部分たるにすぎない。だが経済史の

仕事はこの限界から出発する。かつ経済史はウクラードをその現実的な発展行程に添うて叙述しなければならぬ。経済史に於ける篇別と叙述の序列は、すでにあくまでも諸範疇はんちゆうじたいの具体的運動法則に則したものでなければならぬ。

同じ近代市民社会を扱うに当って、経済学は資本家的商品の分析から出発して土地所有からは出発せず、土地所有はむしろ全巻の分析の一応の帰着点を形成しているのだが、経済史に在っては土地所有からむしろ始めなければならない。レーニンが「ロシアに於ける資本主義の発展」の篇別を以て示しているように、具体的なロシア近代市民社会の経済史的分析は、封建的土地所有の解体の測定を以て始まる。それは資本家的生産様式及び関係の叙述から始めるのでなく却かえつてそのための歴史の諸前提の解明から始まっている。資本論における理論的到達点、限界点の一切が、「発展」における方法的開始点をなし、叙述と篇別の逆の序列を規定している。論者の中で可逆法または倒叙法と称せられているものは経済学に固有な方法であつて既に経済史の方法ではない。これを不当に史学従つてまた経済史学の方法にまで一般化すると神秘主義に到達する——現代から過去を構成するという仕方は、却かえつて観念論史学の定法であるだろう。故にマルクス自身、この種の不当な適用をいましめて、「所謂歴史の展開」または「辯護的」史述法と経済学に於ける可逆法と同一視すべからざる所以ゆえんを述べたのである。(二)

(二) 「い、わ、ゆる、歴史的展開は、一般に最後の形態が過去の諸形態を自分自身に対する段階として観察し且つそれらをつねに、一面的に、理解する、ということに基いている、蓋し最後の形態は稀に、かつ一定の條件の下においてのみ、自己を批判することができるのだから」(経済学批判序説)

扱さて経済史に於いてはもろもろのウクラードがまともに取扱われねばならぬということは、経済史が経済学と異つて既に与えられたる全具体性における社会経済的構成を対象とするからであつた。だから経済学の一応の仕上げとしての位置にある階級構成にしても、経済史に於いては最早もはや特定生産様式に本具的な基本的諸階級のみでなく、与えられているすべての階級及び階級分派が、析出され彫琢ちやうたくされていなければならない。(二) 経済史は、その方法がまさに経済学の逆の仕方、諸範疇はんちゆうをその歴史的發展の行程に添うて展開するという仕方によつて、よくこの任に耐えうるのである。その場合、経済史のこの仕方が可能になるのは、経済学の成果を自己のものとして既に受取つているがためにほかならない。

(一) かくてまた、さきにもつぱら残存物としてのウクラードについて述べたところは、同様に特定社会経済的構生まの内に孕まれる新たな萌芽的生産様式としてのウクラードにもあてはまる。

第三のウクラードの概念として、論者は特定生産様式それじたいの内部的各发展阶段——たとえば資本主義的社会経済構成に於けるマニユファクチャア時代、大産業時代及び帝国主義時代等を数える。これらは各異別なる生産様式を示すものでない、といういみでウクラードとして概念されているのである。しかし、これら諸時代はさきに資本論について見た如くごと経済学そのものの究局的到達点として——資本制生産様式の運動法則じたいとして、必然的に与えられなければならない。これら諸段階から抽象したような資本制生産様式なるものは、すでに内的發展の法則性から抽象された一片の觀念にすぎないだろうから。かくて第三の意義におけるウクラードは当然経済学によつて与えられる。しかし、経済学はそれを依然としてただ純粋型に於いてのみ、即ち遺物等々としてのウクラードから作用されない、また作用されないままでそれじたいとして理解されるところの發展段階及び形態として、与えるにすぎない。経済史はこの経済学の到

達点から出発して、全複合的形成に於ける——たとえば——帝國主義段階の社会経済的構成の認識におもむく。

かくて経済史に於て与えられた具体物は経済学の場合よりもより豊富な質的規定性に於ける具体物である。そして、より豊富たりうる所以は、経済史に於ては具体物はすでにその史的展開の行程に應じて与えられるということから得られたものであった。

ついでながら、経済学に於ける固有の対象——全研究の到達点として与えられる資本制生産様式の全姿としての純粋型資本制社会経済的構成——は、いわゆる「上部構造」を含むか、含まないか、という問題が論ぜられており、最近の論者は總じて「含む」という見解を表明している（例えばミーンチン。「社会の根底をなす経済的制度だけでは、まだ社会的経済的構成という概念を全部云い盡してはいない。……経済的基礎とそれに対応する上部構造……との具体的統一においてのみ、各々の社会経済的構成は、或る全体的なものとして、生きた「社会的生産有機体」として現われる」。邦訳九一—二頁）。この「含む」という意味は、しかし、「経済学批判序説」でマルクスが経済学の篇別として示している構成の意味において理解さるべきであろう。即ち「第三に、市民的、社会の、国家形態への包括。それ自体に関してのみ考察される。「不生産的」階級。租税。国債。公信用。人口。植民。移住。第四に生産の国家的関係。……」。

このいみで「含む」。このことは経済史の場合も同様である。経済史は、ただ、それらすべてを史的展開の序列に應じて展開する、ということから、一層豊富な具体物に到達するにすぎない。

既に経済史で到達される具体物は、まさにこの意味で上部構造をも、それじたいに關してのみ考察しつつ含むものであり、第二に、前期形態からの遺物としてのウクラードを含むところの全具体性における社会経済的構成であり、第三に、特定生産様式の各内部的發展段階としてのウクラード——たとえば帝国主義的段階——にしても、経済学に於いてのようにその純粹型に於いてではなく歴史的具体性において把握されたものであり、最後に、かくて特定の現実的な社会経済構成の全姿をその先行物からの転化——發生、發展及び消滅に於いて、即ち歴史的發展の全環との關聯に於いて追跡するものである。そしてこれらすべては、経済学が経済史の方法であり経済史は経済学の実現であるという關聯からして、既に質的に規定された諸關係の歴史的——發達史的綜合として、与えられているのである。だから、経済史に固有な対象として到達される具体物は、すでに史的發展の行程に照応しつつ領得され、それゆえに全複合性において領得されたところの、且つ所与の全複合体としての歴史的事在にとつて語の真実の意味で「土台」と云われうるところのものであり、一切の歴史記述はそこへつねに立還り、そこからつねに再出發する。

エンゲルスは、マルクスの最初の歴史記述的著作たる「フランスに於ける階級闘争」への緒言のなかで、歴史記述と経済史との如上じよじょうの關聯について、下の如く記している。

「ここに新たに出版される著作は、彼の唯物論的見解によつて、時代史の一片を、与えられた経済状態から説明せんとする、マルクスの最初の試みであつた。

日常の個々の事件および事件の連続を判断するにあたって、最後の経済的原因にまで溯るこ

とは、とうてい不可能であろう。……或る、一定時期の、経済史に關するはつきりした鳥瞰ちようかんは、同時代には決してこれを得ることが出来ないで、ただ後日になって、材料を蒐集しこれを振りわけえて、初めて得られるものである。この場合、統計は必要欠くべからざる補助手段ではあるが、いつもそれは歴史の後から跛行的はこうについて行くものである。

従つて、現に経過しつつある時代史を書くためには、この最も決定的な要因を恒久的なものとし、当該時期の初めにあつた経済状態を、全時期に亘つて一定不変のものとして取扱うか、ないしは、明白な事件自体から発生し、従つて同様に明々白々な経済状態の諸変化のみを斟酌しんしゃくすることを、しばしば餘儀なくされる。であるから唯物論的方法是、この場合しばしば、政治闘争を、経済的発達によつて与えられた社会階級間および階級分派間の利害闘争に還元し、かつ個々の政党を、これらの階級と階級分派とに多かれ少なかれ照応する政治的表現として指摘するだけにとどまらざるを得ないだろう。

研究すべき全過程の實際の基礎であるところの、経済状態の同時代的諸変化が、かように不可避的に閑却されることが、誤謬の源泉となるべきことは自明である。……マルクスがこの著述に着手した当時は、上述の誤謬の源泉は、さらに一層避くべからざるものであつた。……かような不利な事情にも拘かわらず、彼はよく、二月革命以前のフランスの経済状態、並びに二月革命以後のこの国の政治史の精確な知識によつて、事件の記述——それは事件の内的關係を、それ以後といへども比類を見ぬように暴露しており、またそれは後年マルクス自身による再度の試験にも、立派に通過したものである——を与えることができた。

第一、回の試験は、マルクスが、一八五〇年の春以来、再び、経済研究の閑暇を得て、先ず、第一に、最近十年間の経済史に着手した結果だった。この研究によって、従来彼が不完全な材料によつて、なかば先験的に推論していた事柄が、事実そのものによつて、彼に完全に明らかになった。すなわち、一八四七年の世界的商業恐慌が、二月及び三月革命の真実の母であったこと、且つまた、一八四八年の中頃から漸次に恢復し、そして一八四九年及び一八五〇年には全盛に達した産業上の繁榮が、力を新たにしたヨーロッパ反動の更生力であったということこれである。これは決定的なものであった。……」（改造社全集第五卷、九一—一〇頁）

ここでは最も限られた意味での経済史について述べられているのだが、それにも拘わらず歴史記述と経済史との間の基本的な依存関係について述べられている。一たん書下ろされた歴史記述をより精細に「試験」するための「最近十年間の経済史」の役割、これは歴史記述にとつての最後の仕上げに於ける経済史の役割を物語っている。だが、さらに肝心なことは、「最近十年間」の最後の、精細な、経済史が得られていない不十分な諸前提のもとで、当該期間の特定事件を史述せしめ得た方法的前提じたいもまた経済史であったこと——即ち「二月革命以前のフランス」の経済史であったということこれである。事件が進行しつつある当面時期の経済史に、事件発生以前の経済史が方法的に代行する。「この場合しばしば、政治闘争を、経済的発達によつて与えられた社会階級間のおよび階級分派間の利害闘争に還元し、かつ個々の政党を、これらの階級と階級分派とに多かれ少なかれ照応する政治的表現として指摘するだけにとどまらざるをえない」という場合、方法的前提として依拠さ

れているもろもろの階級及び階級分派の關係の總体なるものは、すでに所与の現社会的社會經濟構成に含まれるすべてのウクラードに關しており、その發展の特定小段階を表現する一定の配置におけるものであり、經濟史としてのみ与えられる形相であつたのである。

歴史記述と經濟史との間のかくの如き直接的依存關係は、「主題」がいかに限定されると、拡大するとに論なく、原則的なものであつた。蓋し^{けだ}經濟史とは、本来、最も根源的な歴史記述にほかならず、歴史記述にとつての基幹部門たる位置におるからである。

従つて經濟史に於いても史的対象は無限の量的限定において、即ち「主題」に於いて把握されうる。この場合しかし対象はすでに質的規定性に於いて領得されている——既に最早^{もはや}經濟学的處理を経過してきているがために。ところで、質的規定性に於いて把握された対象の量的限定の最高限界は、歴史記述の基幹部門としての經濟史にあつては、いわゆる發展段階の理論を構成する。さきに經濟学の方法に於いて否定されたところの「生産の歴史的發展過程をその種々なる階相^マに於いて追跡する」という課題ははじめてここで果される。蓋し^{けだ}、「經濟学批判序文」の公式に於いて社會經濟的構成の前進的諸時代としてあげられている所のたとえは古代的、封建的及び近代市民的生産様式の夫々の^{それぞれ}歴史的規定性に於ける質的規定は、この各々に照応する各理論經濟学の分析が与えるところであるけれども、事物の本質に到達するための經濟学^に固有な可逆的方法——もしくは上昇的方法——の故を以て、各理論經濟学の単なる總和によつては發展段階の理論は形成されえない。この点を判り^{わか}易く^{やす}するためにはつぎの例で充分であらう。マニユファクチュア時代なるものは狹義の經濟学が資本生産様式じたいの端初的^{はつちめ}發展段階として規定するところであつた（そして經濟学の限界内では

これ以上の規定は与えられない)。しかるに封建的社會經濟構成から資本制構成への現實の轉化にあつて、このマニユファクチュア段階としての資本制生産様式は、封建的社會經濟構成に孕はらまれるウクライドとしての存在から發展して、すでに實質に於いて他に對するいかなるウクライドでもなく、さりとしてまた他をウクライドたらしむる照明者としての位置をも確立するにいたらないような——かかる位地を確立すものは大産業時代への轉化であつた——ある過渡的な段階を形成し、この段階に照応する特定階級關係・一方で土地所有者階級他方でマニユファクチュア市民階級・の均衡の上に、過渡期の政治形態としての絶対主義が形成される。かくのごとき、經濟史的意味に於けるマニユファクチュア時代、従つてまたそれに照応する政治形態の理解は、過渡期の社會經濟的構成の全複合性における把握からしてのみ与えられるところで、もっぱら特定生産様式のみを自然史的合則性の解明に終始する理論經濟学の究局的限界点ママから出發するところの、歴史認識の手續きに於ける經濟学のバトンの繼承者たる經濟史によつて、はじめてよく与えられるものであつた。ここにあげたマニユファクチュア時代の事例に代えるに、人はブルジョア革命のもろもろの型はいかにして規定されるか、という事例をとつて考えることもできよう。いずれにしても、經濟史の最高限界としての發展段階の理論は、個々の理論經濟学が歸結するところの各々の生産様式の質的規定を、単に再叙述し単に積重ねること得られるような、御手輕なものではありえない。

第三章 史学分類及諸問題

「歴史を体系的に概念によつて区分することは、わが史学の素材がこれを許さない。歴史の諸事實は実に時間と空間とに於ける諸変化であるから、これら両關係に従つて素材を区分するのが最も一般的な方法で、かつ時の順序が主として決定標準となるようである」^(一)。

(一) ベルンハイム「歴史とは何ぞや」第二章第二節。

客観的な方法をもちえない史学にとつては、真に方法的な史学分類もまたありえない。そこで「素材による区分」という、彼らみずから認めて便宜的・非方法的とせざるをえない分類を以て満足する。「絶対的で且つ永久に妥当する歴史素材の区分というようなものは、素材そのものの性質上ありえない」。対象の無規定性は、ここでは素材の無規定として、さらに素材の無規定性が史学分類の無規定性として、正直に表明されていたのである。

唯物論史学の理論のみが、真に方法的な史学分類を与えうる。蓋し史学分類とは、抑々方法からの要約でしかないのであるし、さきに論じたいいわゆる対象規定の、より詳細なる再規定にほかならないから。

一 経済史

経済史が歴史記述にとつての直接の方法的基礎であり、かかるものとして歴史記述のそれは基幹部

門を構成することを、既に述べた。

経済史の最高限界としていわゆる発展段階の理論があることを既に述べた。この理論は、それに到達するための前提たるいわゆる「広義の経済学」——資本制生産様式を対象とする「狭義の経済学」から区別された「前市民的理論経済学」すなわち封建的・古代的等の各生産様式それぞれを対象とする夫々の理論経済学が未完成であることからして、今日なお完全な形態に於いては与えられていない。最近数年の間に嵐のごとく捲き起され、歴史科学界の寵題目となつてゐるところの「アジア的生产様式」の論争が、最も端的にこれを語つてゐる。たまたまこの問題は、経済学および歴史記述のためには、最も重要な前提であるかを、一切の唯物論的史家にいやというほど納得させる。記述学派史学にとつては——むろん記述学派経済史学にとつても、「アジア的生产様式」はなん等問題たりえない。なお不十分な形態に於いて見出される唯物史観的發展段階の理論が、旧史学に於ける一切の恣意的な同似物に対してはすでに十分に充分な、科学的理論構成たりうる理由がそこにある。「アジア的生产様式」の論争じたいに触れることはしかし本稿頁数の限度外にある。

発展段階の理論は経済史の最高限界である。これに対して各発展段階を表明する特定社会経済的構成じたいの限界内における固有の発展諸時代の経済史が存在する。これと、経済学によつて到達された純粹型に於ける各時代の形態區別とは、必ずしも同一でないことを前に述べた。この不同性の故に、同一発展時代が異なる諸條件の下にとつて一定数の型制をあきらかにするようないふ。そのような任務を帯びたこの部門の経済史が存在する。

エンゲルスが「フランスに於ける階級闘争」のために関説した場合の経済史は最も限定された最狭

義に於けるそれである。けれどもかかる一国の、特定十年間の経済史にしても、それじたい世界史的ひろがりに於いて与えられるということは、生産の資本主義的發展段階と共に愈々必然的いよいよなものとなる。このほか夫々の「主題」に應ずるものも個別経済史が存在するが、「主題」の根底に一の具体的全体がつねに把握されていなければならぬこと、多言を要しない。

最後に、現実の経済史の反映としての経済学説史——現実の経済史の多かれ少なかれゆがめられた反映としての諸経済学説の批判的歴史的發展。かかるものとしての「剩餘価値学説史」が、資本論の本来の「第三卷」として篇別されていた。「経済学であると、同時に、歴史記述である」というネチキナ流の見方にあつらえむきなものは資本論ではなくてまさにこの剩餘価値学説史であろう。それはブルジョア経済学説への直接的批判としてそれじたい理論経済学にぞくしているし、イデオロギーとしてのブルジョア経済学説の歴史的展開であるという意味では同時に、歴史学にぞくしているのだから。ところで、これはすでにイデオロギーの歴史として、哲学史宗教史等と同様に級別さるべきもので、特に経済史のところでは挙げるにふさわしからぬものではないか？ 私はしかし敢えてこれを経済史の中に数えねばならない。多かれ少なかれ経済学説といわれうる種類のものが近代市民社会の形成につれてあらわれはじめて以後というものは、このイデオロギー部門を省察することなしには真に具体的な近世経済史は書かれえない。ところで、宗教史文学史等のイデオロギーの歴史のほうは、時代の近世・封建を問わず、すでにして経済史なしには存在しえない。

二 「上部構造」の歴史

「政治・法律・科学・等々の、芸術・宗教・等々の歴史なるものはなんら存在しない」。

(一) 「ドイッチェ・イデオロギー」岩波文庫版一三三頁。

だから私は、ここに「上部構造」の歴史なるものを、史学基幹部門として述べた経済学のつぎに、構造的に分類するつもりはもっていない。ただつぎのことを云わんがためである。

「これら生産諸関係の總和は、社会の経済的構成、すなわち法制上の及び政治上の上部構造がその上に立ち、特定の社会意識形態がそれに照応するところの、現実の土台をなす」といわれる場合、第一に、社会経済的構成の概念は上部構造をあっさり除外せるものでなく、それじたいに關して考察しつつ (in Beziehung zu sich selbst betrachtet) 含んでいるということ (既にこれを述べた)。従つて経済史に於いても、かくのごとき限定された關聯に於ける上部構造の歴史は不可缺の要素として組みこまれてゐること (これも簡単に述べた)。第二に、上部構造及びイデオロギーの歴史は経済史に立ち還えることによつてのみ与えられるが (上掲、「……等々の歴史なるものはなんら存在しない」、その場合銘記すべき一事は、上部構造の歴史は、経済史の、実現形態たる位置にある、ということである。歴史記述学の本論は、本来ここからはじまるといえよう)。

私はさきに、対象としての歴史的具體物を科学的に領得する序列において経済学は第一階梯であり、経済史は経済学の実現形態であると述べた。もしも自然辯証法が、自然認識における世界觀的契機の科学的成果として、エンゲルスが論じているように各々の自然科学分野の認識論的序列を与へるものであるとすれば、歴史認識に於ける世界觀としての史的唯物論の課題としても、歴史諸科学に對する歴史認識論的序列を規定することが、与えられてあるにちがいない。私はこの問題を基底に

置きながら、本稿を辿つてきたものである。しかし私は、この問題をなお充分には考え切っていないし、況んや叙述し得てもいない。はやいはないが、私はこれまで経済学以外の社会科学の位置については殆んど何一つ述べていないが、経済学に就いてより詳細に論じることなしには、爾餘社会諸科学の問題には立ち入ることができないであろう。しかしここではむしろ経済史以降の關係が重要なのである。上部構造の歴史は経済史の実現形態である——という意味が正当に理解されるための前件たる限りで経済史と経済学の關係をあらまし見たにすぎないのである。上部構造の歴史が経済史の実現形態だということは政治史について、たとえば「ブリュメール十八日」エンゲルス序文の中でつぎのごとく述べている。

「フランスは、歴史的な階級闘争が、その他のいずれの国よりも、いつでも決定的に闘われた国であり、階級闘争が、そのうちに行われ、またその結果が、要約されるところの、変転しゆく政治形態が、最も鮮明な輪廓で刻印されている国である……」

……歴史の運動の大法則を最初に発見したものはマルクスその人であった。即ちこの法則によれば、一切の歴史上の闘争はよしそれが政治上・宗教上・哲学上ないしは其他の觀念上の領域に起ろうとも（上部構造の歴史）、実際においては、それは社会階級の闘争の多かれ少なかれ明白な表現にすぎないものである（経済史）、そしてこれらの階級の存在と、従つてまたその衝突とは、さらにその経済状態の発達程度により、その生産の性質及び方法と、これによつて決定せられる交換の方法とによつて、制約せられているものである（経済学）。この法則は歴史にとつて、かのエネルギー轉換の法則が自然科学に対する意義と同一の意義をもっている。そしてこの法則こそ、ここでも彼に、フラ

ンス第二共和政の歴史を理解する鍵を与えたのであった(括弧内引用者)。

また同じ著作に対する著者序文の中では、

「最後に私の希望することは、本書が、今はなかならずドイツに流行しているいわゆる「シーザー主義」なる冗言を一掃するために貢献せんことである。人々はこの浅薄な歴史上の類似によって、古代ローマにおいては階級闘争はただ単に特権的な少数者の内部においてのみ、即ち富裕な自由民と貧しい自由民との間においてのみ行われ、人口中の多数を占める生産的大衆、即ち奴隷は、この闘争のための、ただ受動的な踏台たるにすぎたかっただけという、主要な事実を忘れてゐる。人々は、ローマのプロレタリアートは社会の費用によって生活した、しかるに近代の社会はプロレタリアートの費用によって生活している、というシスモンディの意義ある言葉を忘れてゐる。古代の階級闘争と近代の階級闘争との、物質的、経済的諸條件は、かくも完全に異つてゐるときに、その政治上の産物もまた、カンタベリー大僧正と祭司長サムエルが共通性をもつ以上には、互に共通なものをもつこと、できない」。

(一) 改造社版全集第五卷一二五―六頁。

(二) 同上、一二八頁。

なお、上部構造やイデオロギーの歴史に關聯して、「経済学批判序説」の最終節が参照されるべきである。その第二項で従前の觀念論的歴史記述に対する分類による批判が与えられていたことは前に書いたが、自己の「現実的歴史記述」のための断片的ではあるが積極的な方法的展開の試みがそれに

続いて与えられている。そのうち上部構造やイデオロギーに關聯している部分としては、

第六項で「物質的生産の發展と、例えば芸術的生産の發展との、割合の等しからざること」。「いかにして法律關係としての生産關係が等しからざる發展を遂げるか」。等。

第八項では、右のうち特に芸術の問題についての詳説。

ところで第七項「世界史」の問題、第八項「出发点としての自然的規定性」の問題等は、上部構造の歴史から普遍史への展開に關聯する。

三 普遍史または一般史

相川氏「歴史科学の方法論」の企図が發展段階の理論の展開としての經濟史にあたるとすれば、グーコフスキー「前資本主義社会史」の企図は普遍史又は一般史の構成であるといえるだろう。總体性が上部構造の歴史に、まで具体化されてある、という点に、この両著の企図に於ける方法上の差別があるであろう。第一章第三節末「前資本主義社会史」篇別を参照。經濟史の実現形態としての上部構造等の歴史が、一方でここにいふところの普遍史又は一般史の形態をとると共に、他方で「主題」的に無限に分化するところの形態をとることは、經濟史の場合、のべたのと同様である。

四 特殊歴史

かくて、特殊史の問題はむしろ「主題」の撰択はいかにして規定されるか、という事に帰するだろう。歴史家は任意に、自己の好みに応じて、いかなる主題をも撰えらぶことができるように見える。「東洋史」であろうと、「国史」であろうと。また国史ならば国史で、鎌倉時代であろうと、明治維新であろうと。さらに「専攻」を求めるならば、幕末維新における特に立憲思潮を、特に外交關係を、特に農村史を、等々。

これらすべてはしかし、果して自由なる撰択たりうるものであろうか。大学の研究室で主任教授から然しかるべき主題を割あてられるという事情を以て、「撰択の不自由」の実証となすものではもとよりない。私が問題としているものはかくのごとき撰択の「不自由」ではなくて、却かえつて真実に自由なる主題の撰択のことであり、主題撰択にあたって歴史家が内在的に嚮きやう導どう（先立たつて導かへ）されるところの、客観的な規準の問題であった。この規準を与える史学部門として、すべての歴史家に、かつすべての「専攻」に於ける歴史家に、残りなく課せられているという意味で「基礎」的な史学部門は一国の現代史である。一切の旧き歴史哲学なるものはこの事実に対する逆さまの形態での表出として見られる。ヘーゲルの歴史哲学が「新ドイツ帝國建設」を前触れする就中なかんずく（とりわけ）時代的、就中国民的な性格のものであったように。科学としての史学といえどもこの事実から解放されることはできない。ただ表出が転倒しないまでのことである。

五 「歴史研究の方法学」

以上の史学分類の途上に於いて、同時に我々は、ブイコフスキー的課題に於ける「歴史研究の方法学」のための基礎的部分をも、すでに経過したものと考える。この謂(意味)を一度にあきらかにするために、さきに第一章の最後の節で、わずかに註の中で触れるにとどまったところの、ブイコフスキー的史料批判学の最後の形式たる「記念物の最終批判的綜合的批判」なるものの分析を行うことが、最も手近な道であるが、紙数の関係上もはや不可能であろう。だからここにはその分析からの結論だけを書いておくにとどめる。

この「最終的綜合的批判」なるものは、ベルンハイムの史料批判学から出発せるブイコフスキーの体系に於ける、ベルンハイムの史料批判学の自己否定として、破綻およびその救出として、あらわれる。対象の処理の仕方から遊離せしめられたような史料の処理の仕方を以てしては、遂にいかなる「最終的」処理も不可能に終わる——そこで最後に、「史的唯物論の理論がその根底たるところの同一の方法の変種」であるような五個の「歴史批判」的方法を以て、一切の史料にいわば現実の魂を与えるをえない。ブイコフスキーの体系はかくのごとくして終わっている。

この五個の最後の方法それじたいは、前に彼の「技術学」に於けるリフレインじたいについて見た場合と同様に、相互の関係規定が夫々不明確な形で与えられているにすぎないが、そのうち例えば彼が「歴史的類推法」と呼ぶところのものは、同一発展段階上の諸国民の歴史には本質的類似が見出されるという観点から諸史料の批判的処理を行うもので、右に述べた発展段階の理論としての経済史の適用にほかならない。そのほか「方法論的考察の方法」にしても、「対照法」及びその「特殊の変種」だという「残存物法」にしても、「補助的歴史部門の資料の吸収法」——「経済学の研究対象と

なる資料」のことが他のものと共にこの中に数へられている！——にしても、すべてその合理的な内容と意義とに於いてならば、如上じょじょうの史学分類のコースのどこかで与えられ終っていた筈である。

そしてこの「最終的総合的批判」と、かのリフレイン部分とを抜き去ったあとに残るブイコフスキー「方法学」とは凡およそいかなるものであるだろうか？ おそらくそれは一方でカードあるいはノートノの作製法の手順の説明と、他方で言語学、考古学、人類学等の「歴史補助学」に関する概説と——のみであるだろう。この後者ならば、それじたい史的唯物論の方法に基く再建と新たな発展とが、すでに著るしい形で与えられつつあることは人の知るところである。それらはベルンハイムの史学に於ける「補助学」的位置を遠く乗り超えて、既にそれじたい歴史認識の序列に於ける独自の領域と限界とを所有するところの、歴史的社會諸科学たるものである。かくいえばとていわゆる「歴史研究の方法学」を諸社会科学部門のなかに解消せしめるというのでは決してない。それどころか、「歴史の諸材料の整理を容易にし、その個々の層の序列を示唆するに役立つ」ところの諸命題——換言すれば史料処理学としての具体的形態にまで、諸社会科学部門の相互に聯絡れんらくするところの方法的諸帰結をまとめあげるといふ仕事は、益々切要な問題として歴史家の前に横わってくる。だがそれはつねに具体的な「主題」と共にある。たとえば「一般史」の方法学として、あるいは「維新史の方法論」として、あるいは「アジア的生産様式」の問題を決定するための方法論として、あるいはウィットフォーゲルが「市民社会史」として形成しているような近代史のための一般的方法学として、等々。

- 服部之總『歴史論』（唯物論全書、三笠書房、一九三五年一二月第一刷発行）所収。
- 地名・人名は通行のものに改めた。
- 読みやすさのために振り仮名を付加した。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- 科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」
<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>
- 「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」
<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>
をご覧ください。